

第五章 碓氷川

一 總説

碓氷川は碓氷嶺に源を發し、霧積九十九入山等の諸川を合せて東流し、豊岡村大字下豊岡村に至つて烏川からすがわに注ぐ、流程十里。

川そのものに他の河川の如き特色を賦與されて居らぬが、川を遡るに従つて妙義の奇峯は愈々眼に明らかとなつて、刻々に變化する山形は怪益々怪となる。又淺間山は之に近づくに従つてその美その光その威その力の凡てを啓示するを惜まない。妙義を望み淺間を仰ぎ得るはこの川に沿ふて旅行する者に取つて、最大の愉樂となつてゐる。

高崎を起點とする信越線は川に沿ふて走り、遂に碓氷峠を越えて信濃に入る。妙

義山に登るには松井田驛に下車すべく、碓氷の紅葉を探るには横川驛若しくは熊の平驛に下車して上るか、或は輕井澤驛迄至つて下るべく、淺間登山を試むるには輕井澤驛か沓掛驛に下車するが宜い。

二 峠の下へ

高崎驛より六哩五鎖にして安中驛がある。町は碓氷川の北岸一帯の丘陵上にあり翠綠に點々白聖はくせいを綴れるまた一の眺めである。町の東三十町ばかり板鼻町の北西なる鷹の巣城趾の山上に立てば、絶壁峭立する下、碓氷川は九十九川を合せて愈々大となる。淺間の雄、妙義の奇、連峯波濤の如くに起伏し、流域の平原眼下に展開して眺望絶佳である、城趾は武田信玄の臣依田六郎の據りしもの。又山頂に大物主命を祀つた鷹の巢神社がある。

列車は川を右に見て溪谷の奥深く突入する。溪谷を壓して碓氷嶺聳え、淺間の火

山は更に高く群山に號令するが如き威嚴を示してゐる。その噴煙の活動は如何に四邊の光景を支配し、或は陰鬱ふんうつふらしめ或は光榮ひかりあらしめるであらうか、朝夕にまた四季に、是等の連峯の色彩の變化は、如何に遊人ゆうじんの眼を樂しましめるであらうか。

安中の次驛磯部には鑛泉がある。停車場の北方三四町北に碓氷の清流を控えてゐる。炭酸性の冷泉れいせんにして胃病に効ありき。この驛に近づくに従つて妙義はその白雲金洞金鶏の三峯を漸く明らかに望ましめ、川を越え松井田驛に上れば、呼べば應へんとする風情にて、天を割かんとするが如き劍戟けんげきは益々尖銳となつて来る。

溪谷は峠に近づくに従つて愈々深く俯さば千仞、川面に日光も射さぬか暗影微動して鋸黒のこくろ、眼もくらまんとする。瑞西すいせいの山中に旅するに似た心持を覺えるのである。横川驛よりは愈々アプト式軌道となり、峠の隧道に入る。隧道の數廿六個、その絶間々々には碓氷川の溪澗けいかん巨口を開き他に求め難き絶景である。

第六章 鏑川

一 總説

鏑川は北甘樂郡尾澤村大字星尾村及び熊倉村砥山より發する南牧川みなまきがわと、同郡西牧村大字西野牧村より發する西牧川さいまきがわとが、下仁田町の西に於て合するもの、十里餘を東に流れて高田川雄川大澤川鮎川等の水を入れ、多野郡八幡村大字阿久津に於て烏川に注ぐ。

溪谷の咽喉やどを扼するものに富岡町あり、溪流の趣は此處より始まる。峽中の都會に下仁田町あり、是れより深くしては幽玄奇嶮である。即ち靈城れいじやう黒瀧山不動寺は南牧川を遡つて達する。

高崎市より富岡まで四町二十八町、下仁田まで八里八町、高崎より下仁田迄で上

野鐵道二十一哩が通する。

二 富岡以西

川は妙義山と稻含山との支脈を岸に築いて流れ、岸壁さまで高からず砂礫廣く敷いた間を清流縫ひめぐつて、瀑溪の音耳にすぐしく、碧落を割する連嶺の脊はなだらかに、水に臨んで傲らず、すべて悠々たる眺めである。吾妻川神流川の如くに奇趣横溢してはならぬが、和靜の境また捨て難き景致である。

三 黒瀧山

下仁田町を過ぎて川を渡れば山容水態漸く一變する。山は鬪喝するが如く、水は冷笑するが如く、滿目凄寥たるものである。

町を後にして南牧川に沿ひて行くこと凡そ二里、北の山中より一流下るに逢ふ。

遂に懸道と分れてこの川瀨と並び、稍や垣々たるものである。岩を嘯む水聲は谷に満ちて、研また樂を奏するかと疑はれる。一里程にして小澤あり、これを右に折れてよりは急勾配宛ら天に架し、縷の如き岨道は山腹を這つて幾旋回、巨巖危うく道を奪つて人体その蔭を過ぎ、老松蒼蒼人影之に吞まれ、滿山寥闊我は塵境を去つて雲上に在るを覺える。

上ること十數町、峰の麓を大曲りに廻れば、朱碧の樓門幻の如くに眼前に現はれる、即ち不動寺である。千仞の谷に臨み嵯峨たる嶂壁を負ふて、朱欄碧瓦の堂宇は壯嚴瑰麗、境内幽邃靈氣澎瀾する。

門内に三岩鼎立し、左岩は頗る雄偉右岩は雲を突いて峭立し、中岩の巔よりは飛瀑珠玉を噴いて落ち、臥龍橋之に架かる。この三岩を品字岩と云ふ。又寺前に望む五峰を五老峰と云ひ、絶頂なる觀音堂の下には大洞窟がある。

寺後の石級を登ること上に不動祠がある。祠の傍らなる石室は開山潮音和尚の遺骨

を蔵し、石室の下には小瀑懸かる。境内には尙ほ天童洞稻荷窟天王嶺湧驢橋三十三
 観音九十九谷等の佳勝あり、山中には木魚鳥慈悲心鳥等の奇鳥が棲んでゐる。

第七章 神流川

一 總説

神流川の水源は上武信三州の境界近く十石峠にあり、東に向つて御荷鉢山と秩父
 山塊との間を割いて走り、平坦地に下つて上武の境界を割き、多野郡新町に至つて
 烏川に合する。その流程十八里と云ふ。

この川の溪流は三波石を以て著はれてゐる。鬼石町の西方一里餘り、美原村大字
 讓原村字柏木舞地内數百間に亘る箇所に於て、大小四十八個の奇石散點するもの、
 これ三波石である。

新町驛に下車して西南一里を行けば藤岡町がある。上野鐵道に依る時は山名驛よ
 り一里半、吉井驛より二里半である。町を南に行くこと三里にして鬼石町に達する

新町驛よりこの町まで緑野馬車の便がある。

二 八汐鑛泉

鬼石街道を神流川に沿うて進む。未だ鬼石の町に足を入れぬ前、町よりさまで遠からの山腹に入汐鑛泉がある。鑛泉宿は僅に二軒、數町を隔てた谷間より湧出で、これを汲み來つて沸かすのである。無色透明にして多量に塩分を含み、磯部鑛泉と質を同じうすると云ふ。一浴して欄に倚るなれば、眼下に神流川は清冽玉を欺き、川を隔て、御嶽の連山は翠綠滴る如く、山盡きて平野は眼路はるかに、近きは赤城遠きは日光の連峰が、皆な鮮かな色ざりである。

鑛泉より數町隔て、淨法寺がある、聖徳太子の草創、弘仁五年桓武帝の勅を奏じて傳教大師の中興と傳へる。

三 鬼石の溪谷

崖高く谿深く、滌々の聲は岩石を繞つて湧く、その岩この石、白地に青き縞置いて怪しきばかりに美しい。道が突角を曲れば彼岸に濃々の黒煙を吐く數本の煙突を認める。

鬼石町を過ぎて一里程進む、一筋の流水碧玉の首飾りし、青色の岩を抱いて渦まいた碧く、激湍泡を飛ばせば緑の虹を吐くかと思はれ、やさしくも華かな風情である。晝尙ほ暗く樹木の繁れば、光ありて輝くか疑はれる。

右手の山腹に人家疎らなるを見る。此處が美原村大字讓原村である。道傍に「三波石案内」取扱と記した看板を下げた家がある。

讓原の宿を出れると、黒塗の幅廣き吊橋が懸崖を連れてゐる。この吊橋の裾よりわが三波石の奇景が展開されるのである。崖を下つて水畔に立つ、流水を挾んで

大小四十八塊あり、その形状或は奇峭或は豪宕、宛ら怪物の群居するが如くである。しかもその色彩に至つては、鮮かなる青色の渦紋美しきもの、波形なるもの、黒白青赤とともに五色の雲を描けるもの、悉く彩筆の妙を盡し川筋八町の間、石に上り石を潜つて興は何時果つるとしもない。晩秋の候ともなれば水涸れて石の奇は愈々露はれる。

四 三波石

此の三波石は三波川層或は三波系と云ふて、地質學上非常に有名なるものである。即ち三波川層は結晶片岩けつせうへんがんの下部或は上部にて不整合系を成し太古界たごかいの下部にあり、略北西南東の走向を以て、關東山脈の東北部に露出し、一般に千枚片岩より成るものである。この岩石の特性として容易に薄板はくばんに削ぐるこゝ、多量の絹雲母を有するこゝが數へられる。この青質白理せいしつはくりの岩石が鬼石の溪谷をして著名ならしめたのであ

る。四十八石の名を左に列記しやう、思ふに形状に依り色に依つて命名したものであらう。

三波石(一石、二石、三石)、日暮石、坪石、硯石、駒蹄石、龍卷石、手淨石、獅子石、夫婦石、茗荷石、虎毛石、浦島太郎釣石、流水石、無名石、鯰石、蛇腹石、護摩壇石、法螺貝石、猫石、立石、伏石、稚子石、五色雲石、釜石、富士石、白藤石、鞍掛石、龜石、唐絲石、姥石、象石、御座石、達摩石、横家石、蓮座石、達摩座禪石、破風石、室石、曼陀羅石、雨乞石、不動石、絹掛石、船石、鎧石、兜石、茶盆石、袖石、阿彌陀石

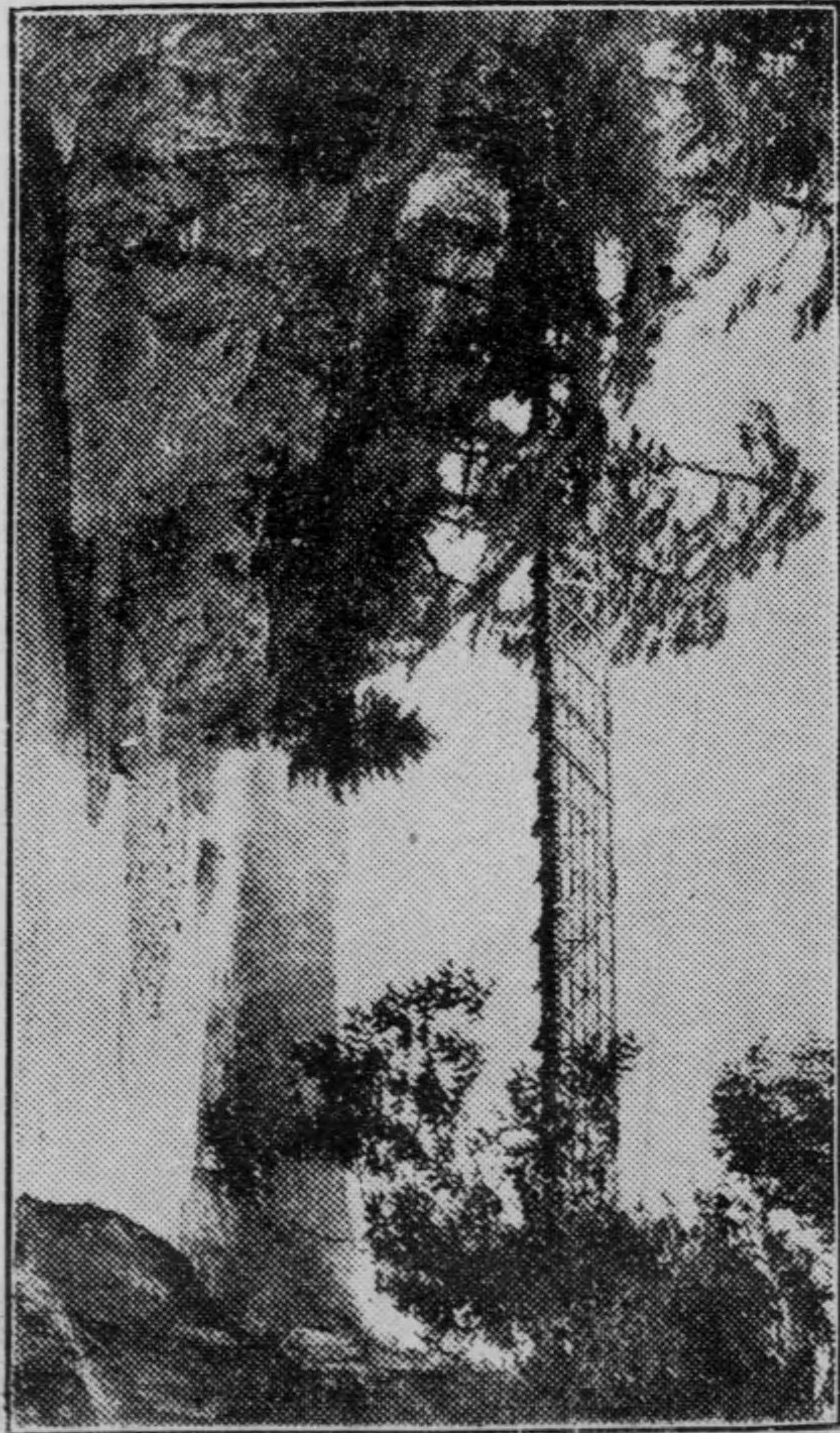
第八章 渡良瀬川

一 總説

渡良瀬川は下野足尾山中に源を發し、赤城山の東麓をめぐつて一度は下野に入り再び邑樂郡北部に現はれ國境に沿ふて流れ、埼玉郡本郷に至つて利根川に注ぐ。その國に在る流程は僅に八里十二町に過ぎぬ。

この川の世に謳はるゝ所以は高津戸の飛橋と跳瀨とであるが、橋と瀧とを以て顯はるゝが如き溪流は、この川と片品川とにして、利根川東方に於ける唯二つの兩川が、その風景に於ても酷似するものあるは興味深く思はれる。

溪流としてその勝景を探るは大間々町より始まる。足尾町に至る足尾鐵道は桐生驛を起點とし、大間々驛を過ぎ、この川に沿ふて登る。足尾銅山に至る縣道も亦川



橋戸津高 圖一十第

に並行してその西岸に通ずる。

二 高津戸

大間々町は赤城山の餘脈と足尾山塊の南端と接觸し、南方漸く關東平原に連ならんとする所に位して、足尾道の咽喉を扼する。渡良瀬川はその東方を流れて、今や山間を去り、平野に就かんとするのである。

川の初て溪流の形を捨てんとする所に、高津戸の絶景がある。町より桐生町に通ずる里道を行くこゝ十町、千仞の斷崖に架するもの高津戸橋である。兩岸迫つて流域細く、崖上に老松亭々、常盤樹落葉樹翠綠の濃淡を争ひ、崖下に奇岩怒立し怪石乱舞す、水色は紺青を融かして白珠を漲らせ、碧潭を作る、低徊佇立する時忘我遊神の思ひがある。この邊りまた紅葉の名所たるを失はぬ。仲秋の空は澄んで山紅く水碧く飛橋また彩らんとする、畫も及ばぬ眺めである。

橋を渡つて四五町行けば、棧道危く、青山白水の幽趣ますます深く、兩岸觸れんばかりにして清流一屈曲をなすところ、急湍勢を極めて落ち奔激して唾石に觸れ、濤々雷鳴し虎嘯する如きものがある。即ち跳瀾にして、その流幅は僅に一間に過ぎぬ。

一望の山光水色、京都の嵐峽に髣髴たるものがある云はれる。

三 溪谷の奥

この溪谷は御影石を以て成るので、石は悉く青く砂は白く、水色はためにますます美しい、水勢甚だ急にして巖に躍つて瀧の如きものあり、崖を洗つて怒濤の如きものあり淵を湛えて藍瑩の如きがある、崖上に古松の枝振り巧みなる、巖腹に翠松水を窺へる迎接に違なき程である。紅葉の候ともなれば巖色流水と映發して、身は仙境を辿るの感がある。

四 桐生川

桐生川は上野下野國境の阿蘇山中に源を發し、國境を流れて桐生町に至り漣良瀬川に注ぐ。流程僅々數里の一小流に過ぎぬが、その上流の幽邃なる絶えて比類なきものである。而も惜むらくは未だ全く世に知られてならぬ。

地域は山田郡梅田村、桐生町より通ずる所謂梅田街道は川の兩岸に沿ひ、二里にして村役場あり、稍進んで一流左の山中より下るに逢ふ、高澤川である。橋の手前で道は二ツに岐れ、渡つて又二ツに岐かる、この左に岐れた二路は川の兩岸に對し暫くにして右岸に兩道合して高澤村に至る。橋の下流に近年鱒を養殖して居る。本道の橋を渡る手前の分岐點に石鳥居あり、渡つて後の分岐點に小學校がある。

溪谷は次第に狭められて行き、窮して道無きかと疑ふ。半里程進めばまた一流左より下る。此處に赤鳥居が立つてゐるが、是等の鳥居は水源近き根本山神社のもの

である。この溪流を溯れば、龍岩の奇あり、岩石の形状龍に似てゐるので斯くは名づけた。更に本道を上りてセリイロ橋を過ぎ、二渡り村に至れば流は「て」の字形に彎曲し、その肩の屈曲の處に石鴨の奇石がある。形状鴨に酷似するからでこの附近鴨形の岩石が頗る多い。奥州村に至れば大根おろし、笹淵ふご云ふ所がある。沿岸の地質恰も笹の如き大根おろしの如きものであるからだ。笹淵を過ぎ根本山神社に達する。その奥院は更に三里を溯らねばならぬ。

この川の特質はその清澄なる水質である。兩岸に三角形の巒峯重復し夏は岩間蹊殊に美しく、河鹿の音は歩一步多きを加へ、秋は沿岸の樹木悉く紅葉し溪水も朱を流す、雪景亦大によし。奥院神官の家に一夜の宿を請へば容易く承諾してくれり。夕陽落ちて墓霽溪を罩むるに至らば、四山靜かに眠り流聲淅々、幽寂極まりなく身は羽化登仙せんとする。峽中の夕、是れこの川の一特色である。

流域に青石更紗石等の美石がある。青石は全く青色なるもの、更紗石は青地に赤

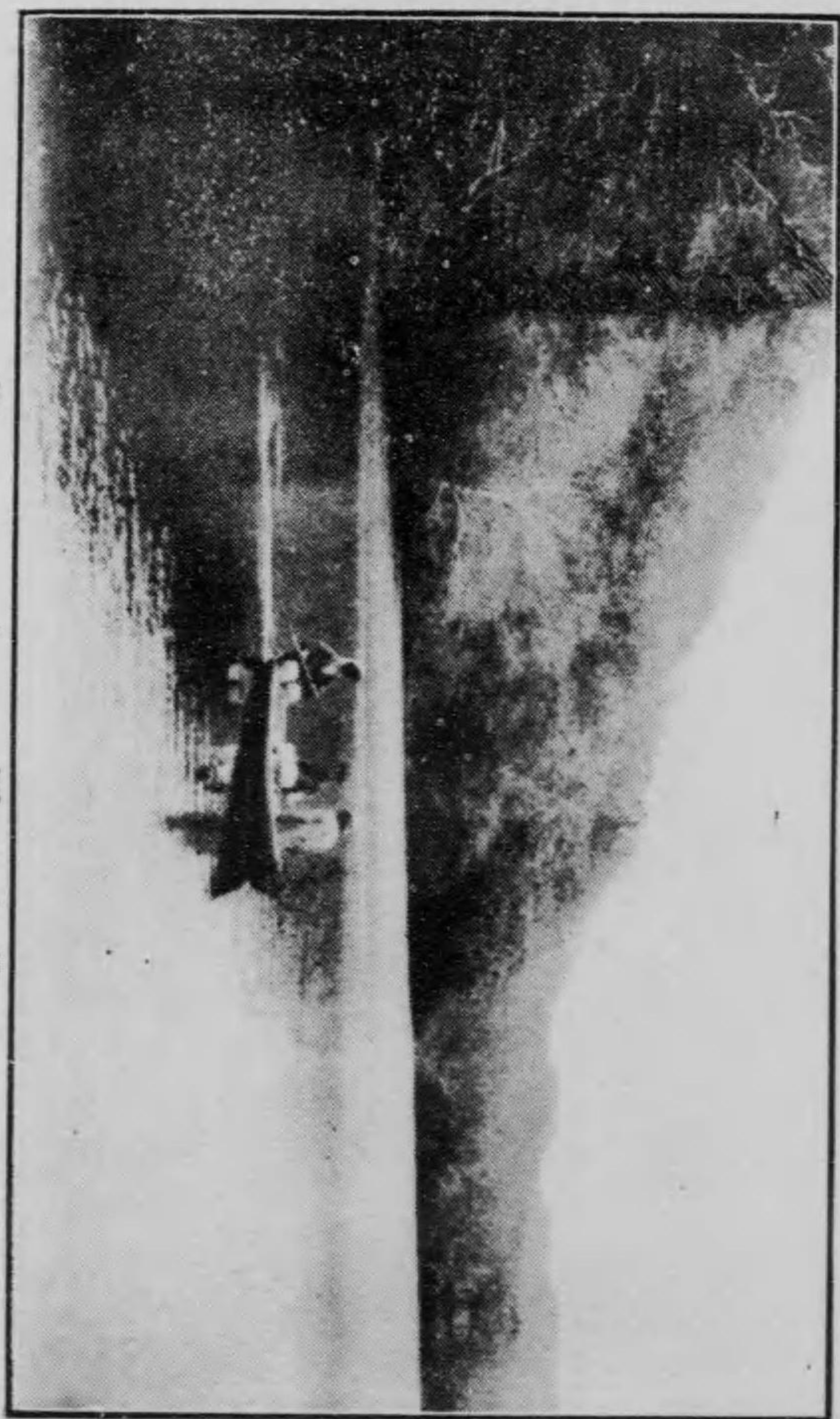
と白とを以て更紗模様の如きを現はせるもの、特に珍重せられる。

第四篇 湖沼篇

第一章 大沼及小沼

一 總說

●●大沼 赤城山の火口原湖なることは既に山岳篇に於て説いた。火口原湖は中心火口丘より噴出した溶岩か、或はその附近より爆裂した噴出物に依り堰かれて、中心火口丘と外輪山との中間即ち火口原の一部若くは全部に水を湛えたものである。大沼に於ては地藏嶽が中心火口丘、黒檜山駒ヶ嶽五輪嶽野坂嶽荒山等が外輪山である。沼の海拔の高さ千三百六十米。即ち黒檜山より四百六十八米低い。長楕圓形にして恰も曲玉の如く、東西十一町四十四間、南北十町二十間、周圍一里十三



沼 大 圖 二十 第

注入水殆どなく、南岸より排水するもの下流は粕川となる。底質は砂泥質であるが北岸より西岸にかけて遠浅をなして多く砂礫を敷き、南岸は山脈迫つて岩石を露みこの邊最も深いが深度は未だ實測されてならぬ、然し大沼よりも深くはない様である。水質清澄、水温廿六度を示す。水は緑色を呈してゐるが時季に依り赤色に變ずることがある。或は微生物の繁殖に因るものであらうと云ふ。

二 風景

大沼の水へは峰々が迫つてゐる。さまで大ならぬ沼はこれがためいよく狭めらるゝが如く、濃緑色の水は暗然として永久の静黙を守り、樹林綠葉を纏へば水は益々濃く、緋の錦を飾ればいよく清く、寂然として一波動かぬ。四邊の峰頭概ね圓錐^{たいすう}を現はすので冥想^{めいさう}を素す怪奇のおるなく、山光水色いやが上に森殿である。之を黒檜山その他の高峰より俯視する時は全形を眼に入れ、深潭^{しんたん}に臨むの感あり、又



大沼の風景 圖三十一第

水に近く砂岸に立つて眸を放てば翠緑の樹林直ちに水に浸り、一枝一葉の倒影も明らかにして漣波脚下より起り、幽寂の氣心身を領する。東岸小鳥ヶ島の浮ぶありて、更に靜默更に幽暗を増し、南岸樹林の間に赤城神社を祀るあつてまことに尊く、放牧の牛悠悠湖畔に遊ぶあつて真に畫くべく歌ふべき景趣である。

壺の底に水を湛えたるが如きは小沼である。周縁の巒峰むしろ荒涼さして水は大沼よりも黒く、彼よりも陰影強く、神秘的の色濃く現はれてゐる。

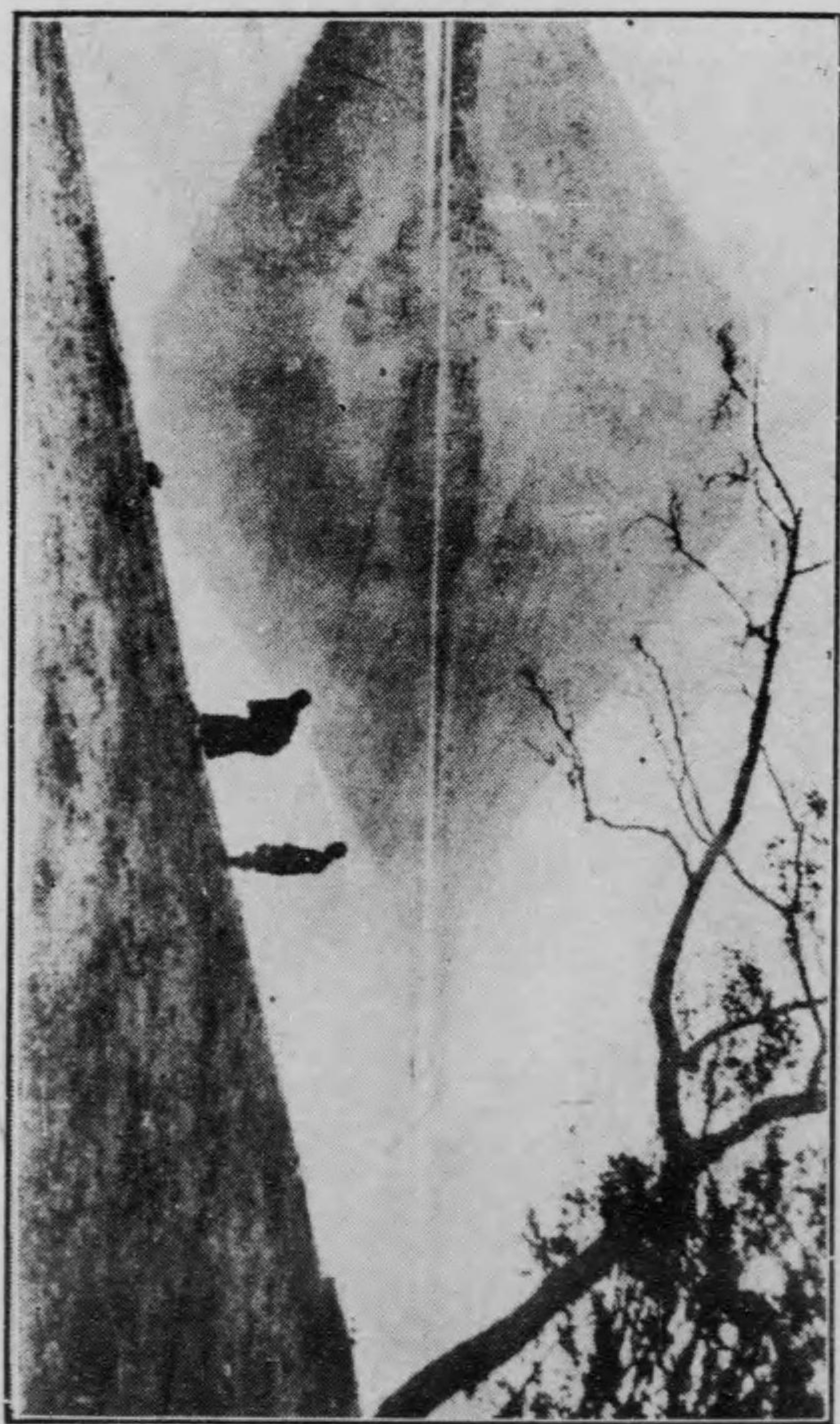
第二章 榛名湖

一 總説

榛名湖も大沼と同じく火山湖にして、中心火山口は榛名富士、外輪山は烏帽子岳、嶺山硯嶽掃部嶽氷室山等なること山岳篇に詳かである。

その海を抜く高さ千八十三米、東北より西南に長さ不規則の橢圓形を現し、南北十七町十三間、東西十一町五間、周圍一里二町、面積百四町歩である。湖に注入する河川は一もなく、湧水三四ヶ所あつて北東一畚山の東方なる大清水最も多く、その西方の石ごやにも湧水がある。而して排水路は高崎電氣株式會社の用水溝と長野堰普通水利組合の疎水溝との二つである。

沿岸は幅約一間ある砂礫地帯を成し、その他は砂地又は泥土質にして水藻は岸近



士 富 名 榛 湖 名 榛 圖 四 十 第

くに繁茂してゐる。榛名原烏帽子嶽硯の南方は遠淺であるが、他は急に落込めて深く、岸を距る六七米の所は三四米、同じく五六米になると七八米の水深を示す而して一番山と硯嶽との間最も深くして十四米である。水は藍色にして清澄、透明度は六米を示し大沼よりも遙かに透明である。又水温は氣温二十三度二十分の時表面温度十七度五分、水面下十米に於て十六度五分であつた。例年十一月頃より結氷し始め翌年三月に至つて解氷する。氷層最も厚き所は一尺四五寸に及ぶ。

夜間温度急降すると氷面收縮して龜裂を生じ、それと同時に一種美妙的な音響を發する。これは大沼菅沼等に於ても聽くことが出来るが、榛名湖に於けるものは田中阿歌麿氏の實驗をその著書「湖沼の研究」より抜く。

「日は早やトツプリと暮れた、湖畔の唯一の宿屋なる湖畔亭橡側の日向で、日中十一度の氣温であつたのが、午後六時頃には氷点下二度に下つた。……午後七時には氷点下三度に下つた。湖上忽ち起る暗夜の大音楽我等は思はず恍惚として此の

美妙なる音律に神を奪はれた。

榛名湖畔には人家と云ふものは僅かに湖畔亭唯だ一軒、然かも其中に神を凝らし、地上の大音楽を聞くは空に燦たる無数の星と我等のみである。地には即ち周圍一里の氷の大圓盤、之を譬へば山姫が寒夜のすさびに天界の大蓄音機を仕掛けたるにも似たらんか、さなきだに四邊は森閑として居る上に、凍てつく寒さに乾燥し切つたる空氣さて、牙えに牙えたる音色……

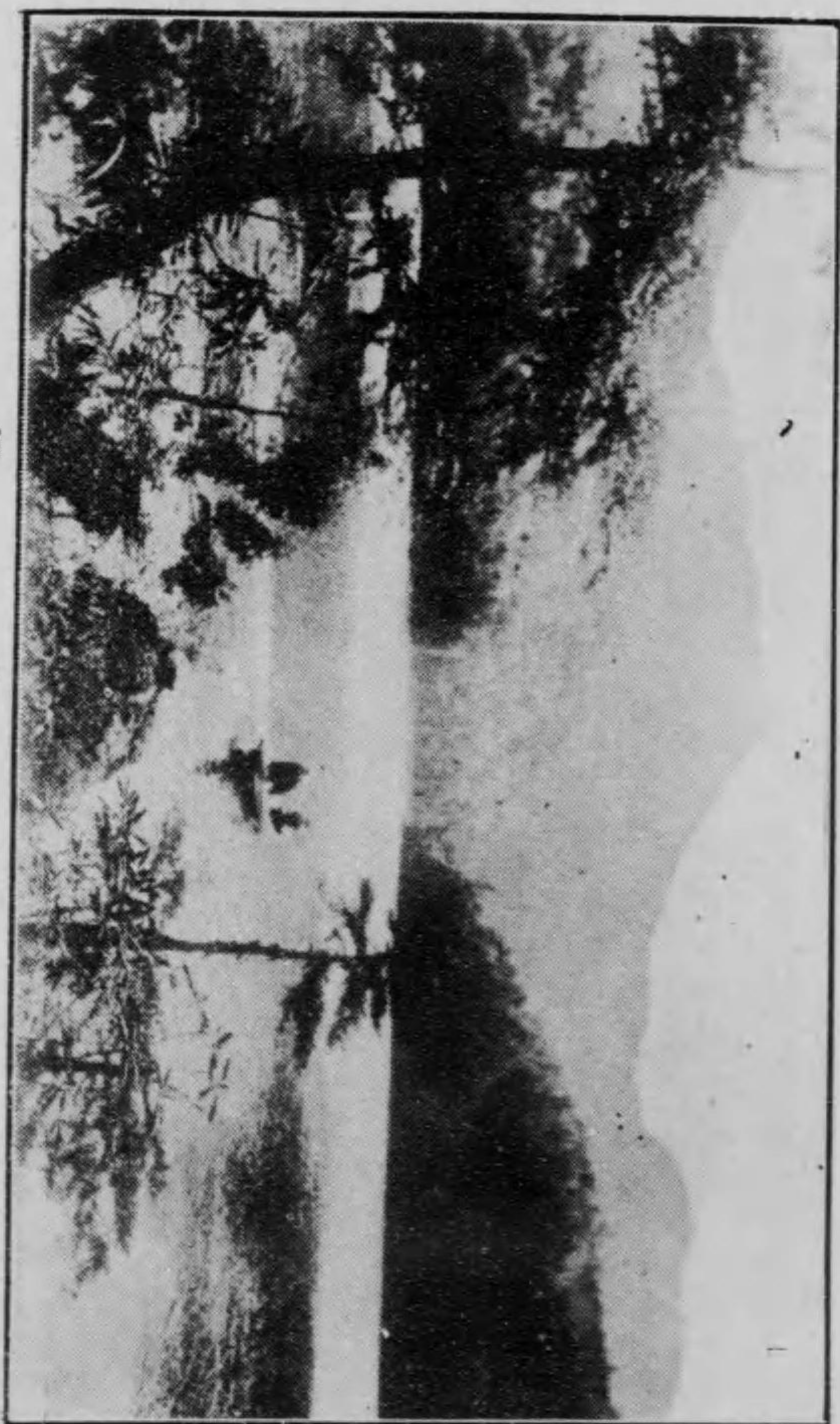
カランコロンは琴の音ボン／＼は鼓、ドン／＼は太鼓、シヤツ／＼は琵琶か、中には一聲ドーンと太砲の響きの様なヤノン／＼との鳴動もある。清音、濁音、細い音、大きい音、或はゴツチャ、續いては絶へ、断えては續く、然かも一音高くなれば四圍の山々は隙さす一々木霊を返すのである。最も巧みなる人の子より成れるオーケストラの妙技も、此の自然が心を凝めた演奏には却々に得及ぶまじと聞き惚れた。」

又前記の龜裂の空隙は下部より押し上げられた水を以て充され、寒冷な空氣に觸れて忽ち結氷する、この新らしき氷は氷面に白い筋を描いて鮮かに美しいものである而して晝となつて氣温高まり水は再び膨脹すると共に龜裂を埋めんとするがために新しき氷は氷面に押出されて大なる堤を作り、或は湖面を横断して山脈の如き觀を呈する。之を信州諏訪湖に於ては御渡りと稱へてゐるが、榛名湖の氷の隆起線に就いて田中千爵は記して曰く

「驚いたことは信州諏訪湖で古來より神業として一種の禍福吉凶を卜するものとして居た、彼の御渡りなるものが、湖岸陸に近い所に無數に存在して居る事であつた。更に又た氷が日中氣温の高い時に膨脹して岸の枯れ葦と氷と一緒に陸地に押し上げられたのが、又た其儘凍りついて宛然たる一種の高さ四尺程の堤を爲して居るなど非常な奇觀であつた。」

二 風景

榛名湖は水面比較的廣潤にして四山高峻ならず、岸上樹林に乏しいので大沼の如き幽寂の趣を欠いてゐる。且つ榛名富士を除いて山形典麗なるものなく、稍や殺風景の感は免れぬ。然し陰影少なく、色彩單純なれば大沼よりも愛すべく親み易き所がある。天神峠上より下瞰したる時は實に一泓の明鏡とも譬ふべく、また瘦胸峠を下つて榛名原を横斷し、漸く南岸に近くや樹林の間にその東半を覗き、稍や山中湖らしき所を味ふ。南岸に湖畔亭レーキホテルあり、水に臨む欄に倚れば茫々細波限りなく、水光燦々、榛名富士は裾を引いて威嚴あり、連山の起伏必ずしも凡ならず、見て飽かぬ眺めである。要するに榛名湖の風景は大沼小沼の如き深刻なるものなく、飽く迄で艶麗明媚なる盆景的のものである。



沼 菅 圖 五 十 第

第三章 菅沼丸沼及大尻沼

一 總 說

菅沼外二沼の成因を説く前に、堰止湖なるものに就いて語らねばならぬ。堰止湖とは火山の周縁に存する所から結野湖（イノの）とも云ふが、火山の噴出熔岩がその山麓と他の山岳との中間なる谷を堰止め、此處に水を湛ゆるに至つたものである。堰止湖の特徴は熔岩で半島を作り湖岸の出入多きと、湖底の凹凸極りない事まで、富士山の本栖湖（もじこ）、男体山の中宮祠湖、磐梯山の檜原湖等は皆な堰止湖である。

● 菅沼 この沼も一の堰止湖である。即ち日光白根が噴火し、その流出した熔岩が西北方の深き谷を堰止め、此處に水を湛ゆるに至つたのである。深山無人の境にあるので、未だ多く世の知る所となつてゐるが、注意すべきことが少くない。その

海を抜く高さ千七百十米。日光白根或は草津白根に存する如き火口湖を除くならば本邦に於て是れ以上高地に存するものを見ない。水面は二所に狭部を有して三區に分れ、その形状琴柱に似てゐる。即ち事實上三個の堰止湖が連絡したものである。三區中西方に在るもの最も廣く長方形を成して北岐と云ひ、中央は三角形を成して中岐と云ひ、東方の三角形のものを清水江と云ふ。東西約十五町南北約十七町、幅は最狭部二十間の處あり、また三町の廣き個所もある。湖岸線の延長は二里に及ぶが、面積僅に八十四町九反四畝十七歩に過ぎぬ。これ湖岸の如何に出入多きかを語るものである。注入水は七流を數へ、内五流は清水江にあつてその一流水量殊に多く、如何なる旱魃にも乾涸する事がない。他は北岐に一流あり、又その對岸山腹より一流湧出瀑下する。而して西方の岩壁を突破して排水し、八町瀧とあつて丸沼に注ぐ。四壁は磊々たる火山岩に依つて築かれ大森林之を蔽ひ、僅に東方に清水平と稱する小平地あり、是も曾て湖底であつたと云はれてゐる。湖岸も湖底も頗る急斜

面を成し、皆な砂質泥土で、水深は各支湖之を異にし、清水江及び中岐は最深部二十米に過ぎず、清水江の東岸二米以内の淺所甚だ多く、水藻を生じてゐるが、北岐は中央部に於て七十五米に達し、斯かる小湖として驚くべきこと、云はればならぬ、北岐は概して深く岸を距る僅にして直ちに五米に及び、東部は最深部三十米に達する。水は極めて清澄にして濃藍色を呈してゐる。湖沼界の森斗フオーレル博士は水色を十一階級に分ち、一號より四號迄を藍色湖、五號より八號迄を綠色湖九號より十一號迄を黄色湖と呼んでゐるが、菅沼はこの標準番號の第三號乃至第四號に相當してゐる。濃藍色の水程透明度の多いものでこの沼は十九米を示す。秋田縣の田澤湖は第一號乃至第二號に相當し透明度三十九度にして、本邦第一に推さるゝのみか全世界稀に見るものであるが、菅沼は實にこの田澤湖に亞ぐと云はれてゐる。水温は夏季表面十八度、冬季は零度に下つて結氷は早い時は十一月中旬より始まり、水深淺く水層の冷却速かにして、風富り少なき清水江及び中岐より始まり

次第に北岐に及び氷層一尺五寸に達する。解氷は四月中旬に始まり、波浪高き北岐最も早く、五月中旬には三支湖共全、氷影を見なくなる。水温著しく大なるに拘らず結氷確實且つ長期に亘るのは、海拔高、冬季著しく温度降下するからで、最大深度五十米以上の湖沼が結氷するのは本洲中菅沼あるのみだ。氷上美妙の音響を聞くことあるは榛名湖と同一である。

●丸沼 菅沼の水は西岸を破つて深谷に瀑下し、茲に丸沼を作つた。その瀧を八町瀧と云ふ。丸沼は海拔千六百五十米、即ち菅沼より低きこと百三米である。楕圓形を成して長徑六町短徑二町、周圍十七町、面積二十三町二反五畝十一歩、沿岸は急斜面なる山岳を以て圍まれ、西北岸に葭原と云ふ平地と、八町瀧に向ふ部分に僅少の平地あるのみだ、葭原は曾て湖底であつたと云はれてゐる。八町瀧以外の注入水は葭原の平地に入澤川湯の澤川江戸の澤川、南東部に「おはなくば」八町下あり、共に山腹に湧くものである。底質は砂泥質にして少許泥質の所あり、西北部淺瀨及び



川合沼と沼丸 圖六十第

沼尻には水草が密生してゐる。この沼は三沼中最も淺く、最深部は「おはなくぼ」八町瀧下及び沼合川の沖合にあつて、最大深度は十九度五に達し、夫れより東北に向つて淺く、葭原沿岸最も遠淺となり、湖底多少の高低はあるが概して平坦である。而して透明度五米、水色はフォーレル博士標準番號の第七號に當る綠色湖にして、降雨の時は土砂を注入して灰色に濁る。水温は夏季十八度冬季は表面に薄氷を結ぶ十二月結氷して翌年三月下旬に解け始まるが、八町瀧下は、嚴冬でも凍らぬ區域がある。

大尻沼 丸沼の水は幅五間長五十間の沼合川となつて大尻沼に流れ込む。この沼は海拔高度丸沼と等しく、形状細長く中央部狹縮して瓢箪形を成すので、一名瓢箪沼と云ふ。北岸に少許の平坦部あるのみで他は概して急斜なる巒峰を以つて圍まれてゐる。注入水は沼合川の外北西部に一流あるのみ、北東部は稍や淺く最大深度廿七米に達する。底質は泥土にして東北部の岸に水草繁茂するが爲めに水色丸沼よ

りも黒味を帯び、フオーレル博士標準番號の第九號に當り、透明度三米に過ぎぬ、水温は夏季四十九度八分、冬季一度四分で表面少しく結氷する。丸沼に比して深度大なるものあるに拘らず、表面温度少しく高いのは、湖底に比較的高温なる水が湧出するからであらうと云ふ。沼の水は大瀧川となつて流出し、その下流を小川と云ひ片品川に注ぐ。

二 風景

吹割瀧で名高い追貝村より會津街道を東へ三里、片品村役場と小學校との角より右に折れ、小川の溪流に沿ふて上り、東小川村を過ぎれば一里にして白根温泉（小川温泉）がある。温泉宿二月、流に臨んで展望の自由は全く奪はれてゐるが、清瀨絶えず耳を洗ふ。橋を渡つて崎嶇險難の山徑を登ること二里にして、の瀨の狭谷に達し、やがて大森林の中に入る。再び小川の溪流に近づけば小瀑相連つて長大なる

瀑布を作り、壯觀極まりない、之を大瀧川と呼び水は即ち大尻沼より排出さるゝものである。

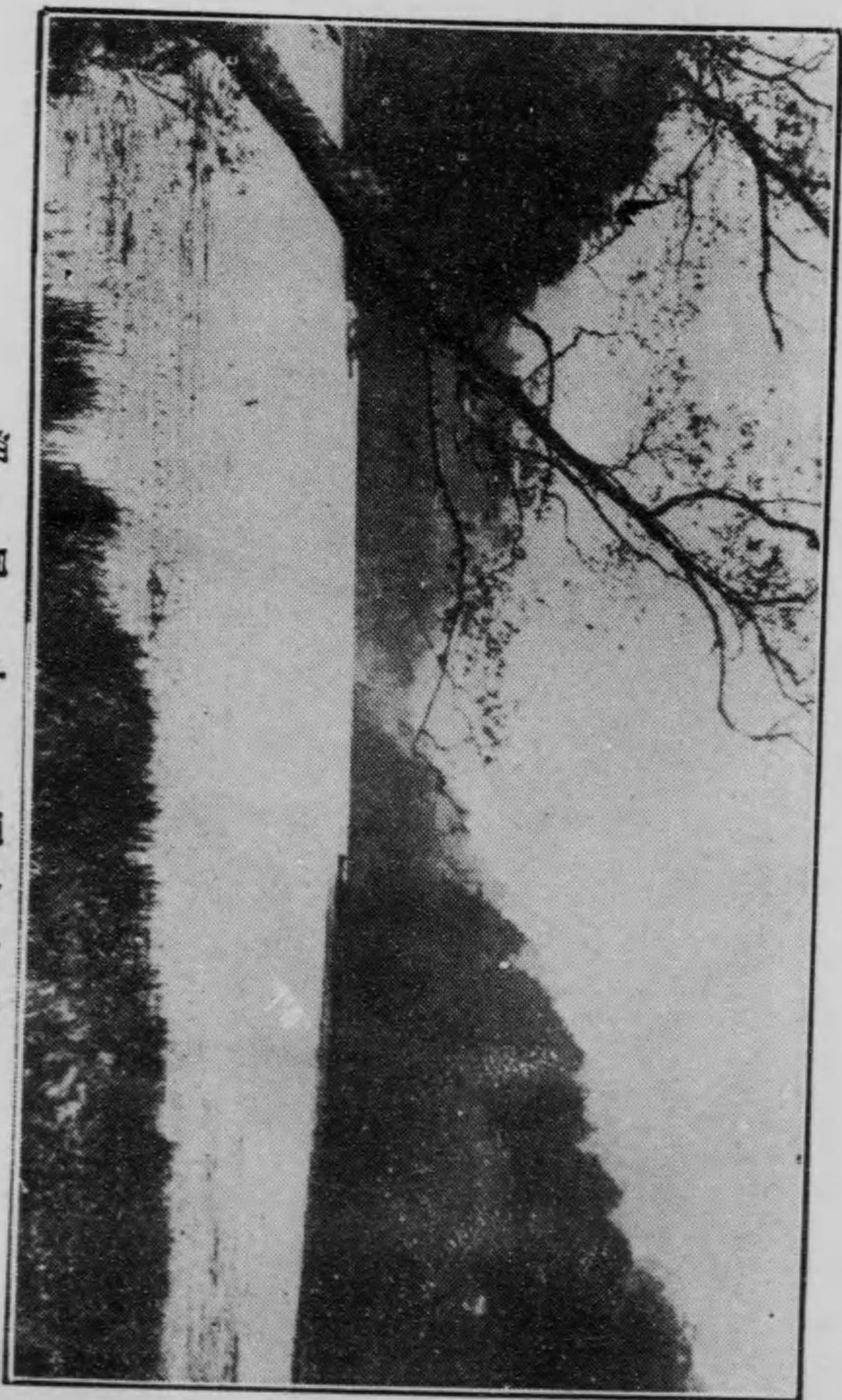
水の落口にて橋を渡れば大尻沼の北岸に出る。沼は大森林中にあつて濃緑の水は甚だ黒味を帯び、水際に水草茂生し森然として怖るべき姿である。岸を進むに従つて湖面或は狭まり或は廣まり、その甚だ興味ある景趣は第五篇中に詳かに記した。

岸を傳ふること半里にして沼合川の北岸に出る、水は頗る清澄にして長き水草之に翳られ、大小の魚は矢の如くに泳ぎ行くを見る。川の長さ數十間、水は丸沼より溢るゝものである。此處に沼合橋架かり、渡つて右の山中を登れば、菅沼の畔に出で、大森林中を里餘にして金精峠に達する、渡すして左に丸沼の岸を廻ればその北岸葭原の平地に至る、菅沼以下二沼に於て大規模に鱒の養殖を營む片品村の豪農千明賢治氏の養魚所と別荘とが、この平地に並び立つてゐる。沼の三方に高峰直立して緑色の水頗る清く、幽邃寧ろ陰鬱に近く、明暗の色彩甚だ神秘的である。殊に菅

沼の水は八町瀧となり、沼の東端に落下するあつて、本邦他に類を見ぬ風致を添えてゐる。葭原の奥敷町岡替の間に湯の澤温泉が湧く。

菅沼の風光は他の湖沼とは全く別種のものである。湖岸の峯形新くまでに齊整優雅なるは珍らしく、而も日光白根を除く外何れも樹林を以て蔽はれてゐるので優婉極まじない。水色の濃藍は全國稀に見る所、凄麗無比、天然の公園と云はんよりも却つて神仙の境と呼ぶべきである。田中千鶴ですら「山間の湖沼として風景の幽邃清明なること、恐らく我國に於て一二を争ふものであらう」と言つてゐる。湖面狭小にして湖岸の出入頗る甚しきが故に、扁舟を操つて縦走横断する時に、四望の景致は絶えず變化して、興の盡くるを知らぬ。その詳細に至つては第五篇中に描いてある。

日光道を辿つて湖邊を過ぐる時は僅に樹間より其片影を捉へ、東岸清水平の平地に出で、清水江を見渡し、又沼尻に立つて北岐の一部を窺ふに止まり、菅沼の菅沼



沼 風 大 圖 七 十 第

たる所以は舟遊に依るの外之を解すること全く不可能である。前記沼合橋を渡つて丸沼南岸の山路を登り、二十餘町にして小徑北より來つて連る所に「森林開墾制限地」の標木立つ、此處より以東半里、右手の樹林の間に沼の隠見するを認めるのである。廣濶なる沼を覗き得ること殆ど絶無にして、隔靴搔痒の感は免れぬ。道漸く水に近く脚下絶壁を作らんとするに達せば忽ち道は下つて清水平に達する。附近の森林中に清泉涿々と湧き、冷冽盛夏尙攝氏五度を保つてゐる。水は流れ、清水平の西端を過ぎて沼に入る。

又丸沼東岸に通ずる甚しき難路を攀ぢ、或は巨巖を登り巨樹の偃れたるを越えて進めば八町瀧の岸邊に出る。瀧の上に丸木を横へて橋に代へ辛うじて之を渡りて彼岸に至り、狭谷の間を流に沿ふて登り。暫くにして菅沼の沼尻に達する。水近く岩石磊々たる所に「路危く通じ、漸く岸を離れ山中に入らん」として二路に岐れ、右すれば前記「森林開墾制限地」の標木立つ所に至つて日光道と合し、左すれば再び水

際ぎわに下り一棟の小屋に盡つきる。小屋は沼に近く、附近に巨巖くわいりつ怪立し此處に於て望むものこの沼の絶勝である。

若し夫れ三沼を比較するなれば、菅沼は瑰麗くわいれい、丸沼は神怪、大尻沼は陰鬱、静寂幽邃に至つてはひとしく無類である。又三沼の落尻を比較するなれば、八町瀬は豪壯、沼合川は清楚せいそ、大瀧川は優婉、沼の景趣と全く別種なるものあるも考ふれば不思議である。

第四章 尾瀬沼

一 總説

尾瀬沼は利根郡片品村大字戸倉、即ち國の東北端に在つて上野岩代兩州に跨またる。沼の北西に聳たえる巖嶽いざな(二千二百四十六米)の噴出した熔岩流つやかんりゅうの堰止めた一の堰止湖である。海拔千六百六十五米、菅沼に次いで高地に在る。形状かたち畧三角形を成し、北東岸は稍々出入が多い、周圍三里四町、面積は四十町中上野に屬するは二十一町である。

水の最大深度は八米五に過ぎず、北方部殊に淺く、稍々清澄せいじやうであるがその水色はフォーレル博士標準番號の第九號と第十號との間に在る。透明度四米三分。水温は表面十七度深度八米の水底すいぞうに於て十六度を示してゐる。

南岸は直ちに山。北岸は奥沼平と云ふ、廣袤約一里の草原あり、白樺の森点在して所々に小池あり、この草原は泥炭質にして濕潤し、時として膝を没することがある。菅沼に於ける清水平、丸沼に於ける葭原の如く以前湖水の一部を成したもので、「振へる地」と稱し寒國の湖邊に屢々見る所である。

注入水には北岸及東岸に亘りあさみ川、うまの澤川、檜澤川、かまぼり川其他二三條の細流あり、排水の沼尻川は西岸より流れ出で大瀑布を作つて奔瀉するので一名大瀧川と云ひ、その下流は只見川となり岩代に入りて伊奈川に合する。沼尻附近には噴瀆あり。大瀧川の南方即ち沼の西南岸の尾瀬平は廣袤三里に及び、土民の言ふ所に依れば現今の沼は早稻沼が本名で、尾瀬平こそ眞實の尾瀬沼の跡である。地質濕潤にして小沼治郎右衛門池等の小池あり、早春、雪解後等には、尙ほ多くの小沼が球數の如く聚つて現はれ、よつび川原を貫いて流れ遂に大瀧川に注ぐ。

二 風景

菅沼條下に於て説く所の會津街道を眞直ぐに進み、越本土出古中戸倉等の諸村落を過ぎ、所謂戸倉の大森林の間を登れば、片品村役場の在る所より八里にして尾瀬峠に達する。峠道は急峻言語に絶し登攀頗る困難である。頂上に立つて南を望めば赤城山は美麗なる圓錐形を現はし、その山腹に富士山をも併せ見ることが出来る。頂上より北に下り敷町にして尾瀬沼の畔に出る。

沼は漂渺涯まりなく、北西岸に懸嶽獨り巍然として天を突く外、西岸一帯の連山遠く翠黛を引き、景鶴山其の中央に三角峰を抜く。會津道の通する東岸森林草原の間には、盛夏の候も石南菖蒲がんとその紅紫黄錦繡を布き、白洲は水の颯るに任せ恰も入江の岸を逍遙するが如き渺茫たる感がある。然し深山無人の境を行くの寂寥を押へることが出来ぬ。半里程にして左に細徑を入れば、沼に瀛りする老人の住宅

がたゞ一軒在る。

北岸の奥沼平を横ぎつて懸崖の麓に至る間も、種々の草花咲き乱れ、若緑の毛氈を延べたるが如く、宛然春の野を行くに異らぬ。小池の面には折節植物が一塊宛浮び、風に送られて漂ふてゐる。殊にこの沼は常に水蒸氣多く、水をも山をも朦朧として怪しくなし、不思議な風景である。

西岸尾瀬平は茫漠たる草原にして、木立の配置遠山の高低、平地に展る緑野を歩むが如く、又この原に生ずる長葉毛氈苔は特に珍重せられてゐる。

第五章 野反池及森沼

一 總説

野反池 吾妻郡六合村大字入口村の山中に在つて、信濃の國境を距ること十餘町に過ぎぬ。この沼の成因は明らかでないが又堰止湖であらうと思はれる。海拔千四百六十七米。四邊山岳を以て圍まれ、北方のみ少しく開けてゐる。形状稍や長隋圓形を成し、南北に長く東西に短く岸の出入は北半部に見るのみである。周圍一里弱、今は北方約四分の一を除き他の湖底は埋没して濕地となり、萱葎土賊類が密生し、西方及東北方に水藻生ずる。水面四十三町歩にして東岸は砂地西岸は砂礫地、中央部は砂泥質である。深度さまで深からず、水質清澄にして藍色を呈し、水温は氣温七度の時十一度を示した。池中に温泉湧出するので池面の結氷薄く、全く結氷せぬ

所さへある。

注入河川としては南岸辨天山（一千六百五十二米）より發する細流あり、又西岸の水際に多數の湧水がある。排水は北岸より流れ出で、魚野川となり信濃の雜魚川に合し遂に越後の中津川に注ぐ。

森沼 吾妻郡長野町嬭懸村大字田代村に至る道路の附近に在る。周圍三十四町面積二十七町、深度一尺に過ぎずして水色藍色を呈してゐる。

二 風景

野反池は草津温泉より北方二里にして沼に達する。又長野原町より須川の上流四里、又草津温泉より二里にして花敷温泉あり、溪流右岸の崖下より湧出し、岩躑躅の花溪を埋むる許りに咲き乱れ、厚く地に疊むので花敷の床しい名が生れた。浴槽は天然のまゝなる岩石を用ひ、泉質鹽類泉である。此處より沼へ一里。沼は北岸を

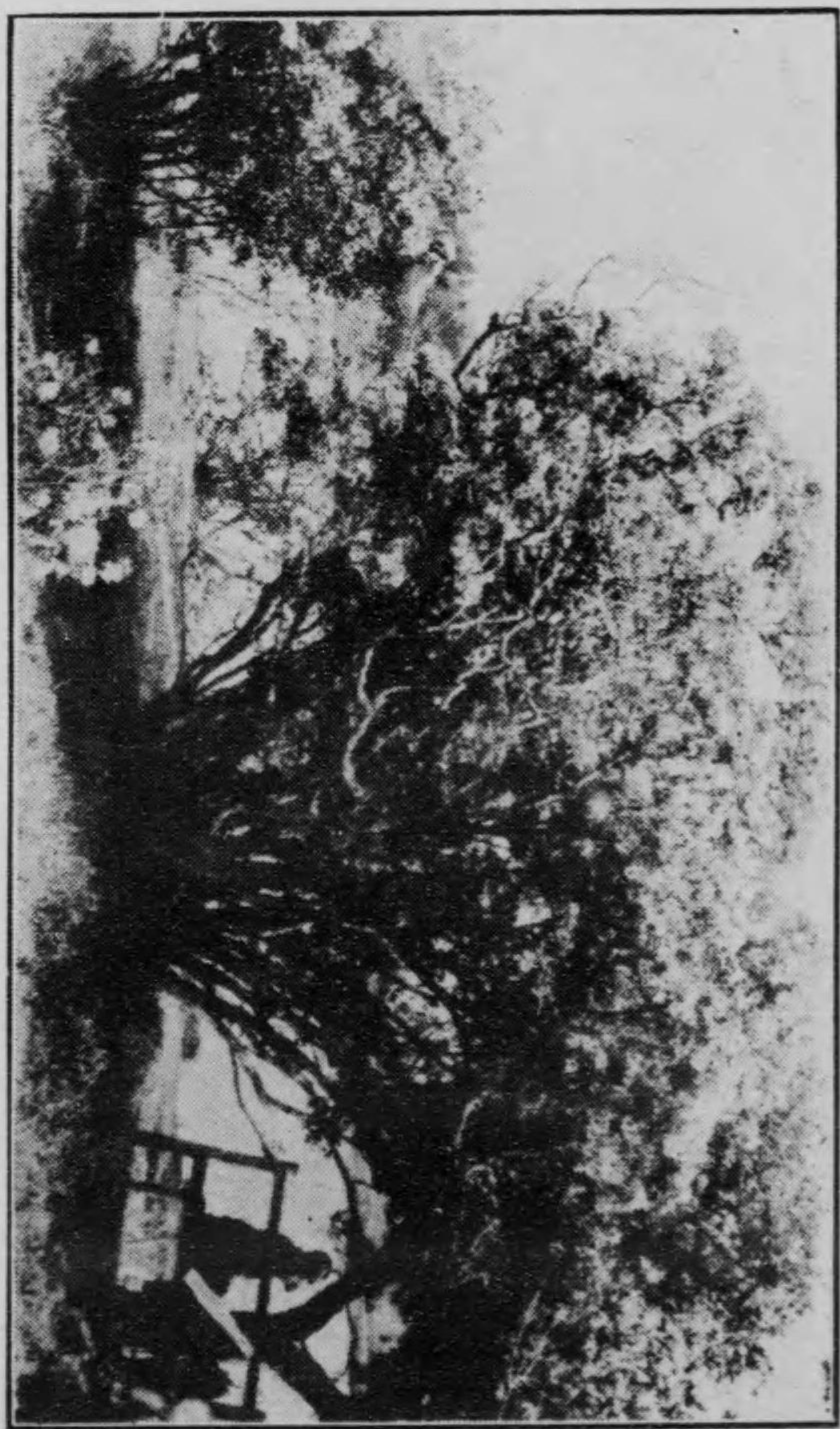
除いて他は山岳に圍繞せらるゝがために、境地甚だ幽邃を極め、山中の湖沼たる景象を充分に具へてゐる。岸に雁鴨の類群集し兎の如きは徒手を以て捕獲し得る位である。

第六章 邑樂の沼

一 總説

關東平原には利根川の流域に多くの湖沼がある。是等は河跡湖かせきことして利根本流或は支流が流路を變じた、めに、水が残されて生じたものである、然し常陸の霞ヶ浦かすみうらと北浦きたうらとは、海跡湖かいせきこと稱して海の遺物である。河跡湖と海跡湖とを比較する時は、前者は形状極めて細長く水の深度甚だ淺いが、海跡湖は淺くとも湖底こていは海面下に達してゐる。

河跡湖の成因せいんは、その形状と河流に對する位置とに依つて、凡二種に分つことが出来る。一は形状長く河流に對して直角を成すもので、是は本流の川床かわまきが次第に高まり、遂に支流の口を堰止めて、上流に水を湛たふるに至つたのである。他の一は形



圖々 野 圖 八十第

狀細長く本流と並行するもので、是は本流或は支流が川床を變じた結果である。

扱て利根川と渡良瀬川との合流点附近には、多數の沼が散在してゐる。即ち國內には中野沼、多々良沼、城沼、御手洗沼、板倉沼、近藤沼あり、下野には赤麻沼、石川沼、越名沼等がある。

中野沼 多々良沼の一部を成してその西方に連り、中野村大字中野村に屬する。周圍十七町十間、東西五町五十五間、南北三町にして面積十一町二畝二歩の小沼である。深度は一尺。底質は泥土質にして水は黄色を呈し透明度一尺五寸に過ぎず、水温は六月廿七日午前十一時廿五度を示した。

多々良沼 多々良村大字日向に屬し海拔二十三米、周圍二里十二町、面積百三十町三反五畝八歩に及ぶ。最深度は夏季八尺冬季二三尺、底質は埴土にして泥深く一部砂土の所あり、水は濁つて黄褐色を呈し透明度一尺五寸。水温は六月廿七日午後二時廿三度を示した。排水は東北方より流れ出て矢場川に注ぐ。

城沼 館林町及び郷谷六郷赤羽三村に跨り、形状細長く三日月に似てゐる。海拔十八米、東西一里四十間、南北五町十間、周圍約一里にして面積四十九町五反六畝一歩に過ぎぬ。底質は泥土質にして水は黄色にやや綠色を帯び、透明度一尺五寸、水溫は六月廿一日午前十一時廿三度乃至廿一度を示した。流れて板倉沼に入る。

御手洗沼 板倉沼の一部を成してその南に連り伊奈良村大字板倉、屬す。形状細長く東西八町五十間、南北一町三十間、周圍二十三町二十間にして十二町八反七畝二十九歩の面積がある。底質泥土にして深度二尺に過ぎず、水色黄色を呈し透明度一尺五寸、水溫は六月廿六日午後二時二十四度を示した。

板倉沼 伊奈良村大字板倉と海老瀬村とに跨り、海拔十四米である。東西廿一町三十五間、南北十町廿五間、周圍二里十二町、面積百八十町九反十六歩即ち一畝沼の中最大のものである。底質泥土質にして腐殖土を混じり、水は黄褐色を呈して透明度一尺五寸、深度は平均二三尺にして最大深度も七八尺に止まる。而して水溫は

六月廿三日午前十一時廿六度を示した。

近藤沼 六郷村大字青柳村に在つて、海拔十九米、東西九町南北三町三間、周圍一里三町にして面積は三十一町四反六畝五歩に及ぶ。底質は同じく泥土にして深度三尺、水色黄色を呈して透明度一尺五寸、水溫は四月三十日十九度を示した。此の排水は矢田川とあつて東流し渡良瀬川に注ぐ。

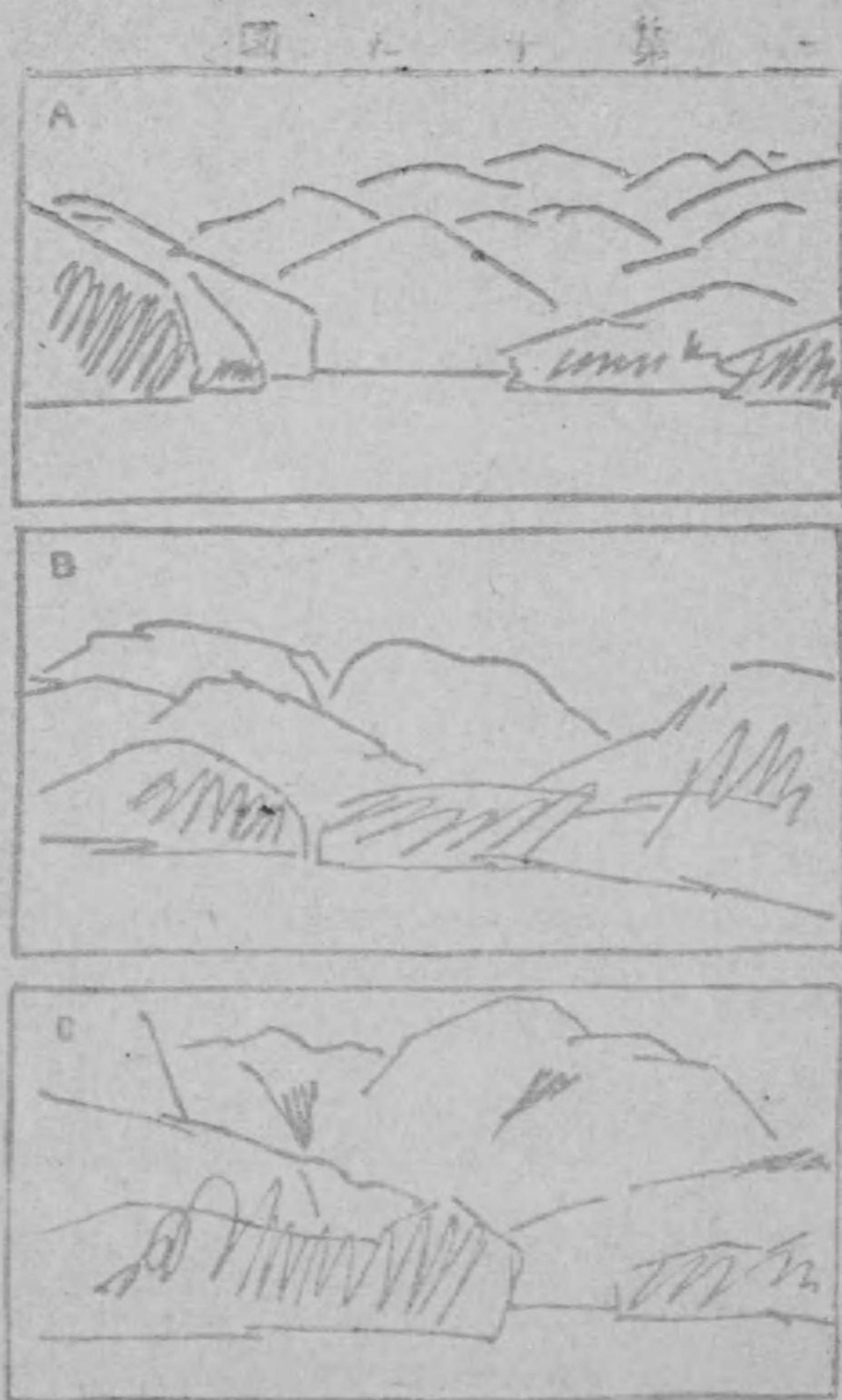
二 風景

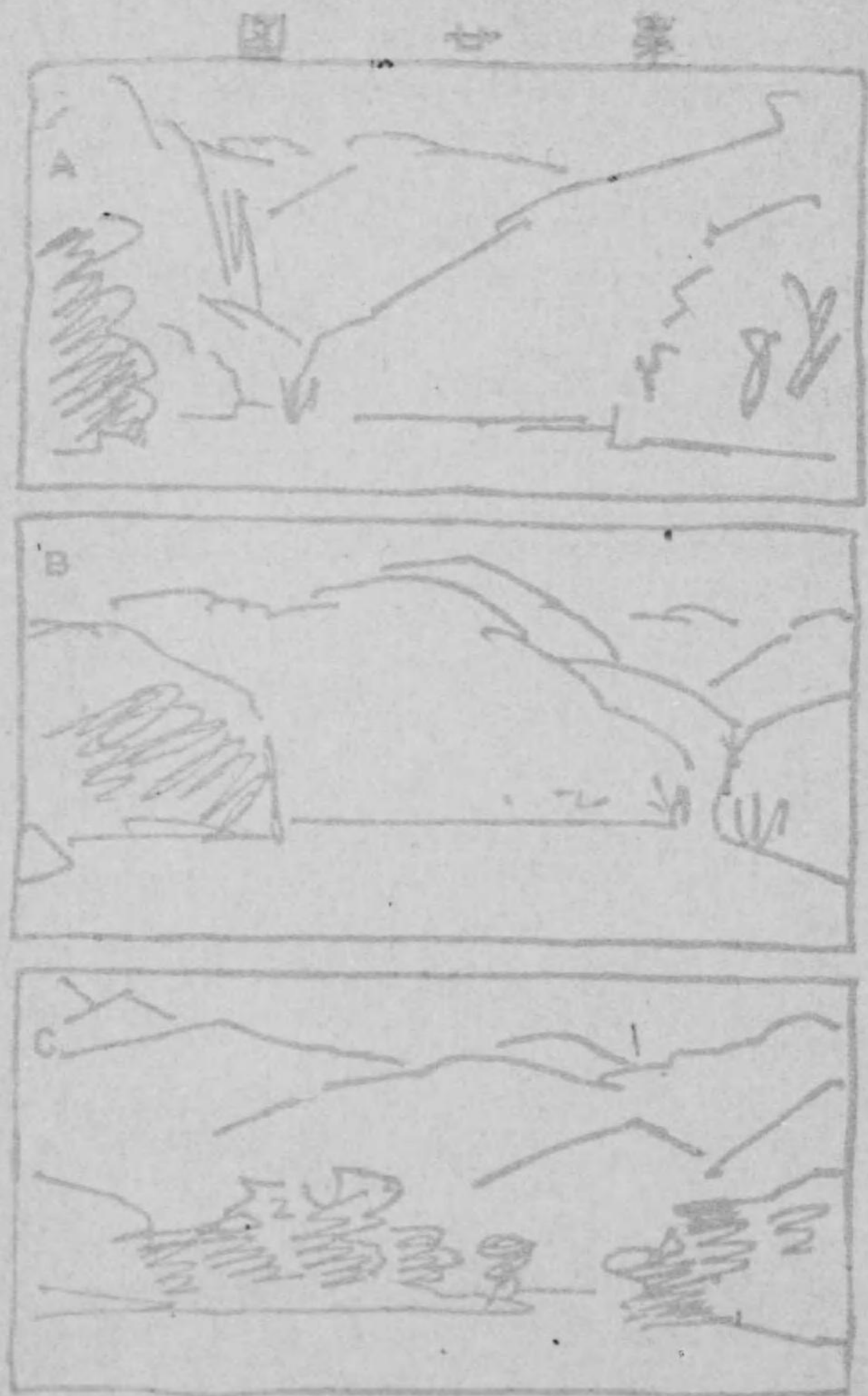
平地の沼は幽邃の趣を缺くが、四邊に木立繁きものはまた捨て難き風致がある。然らざるも板倉沼の如きは稻田參隴の間に介在し、漫々たる水を湛ふるもの、春光遍き時は浩蕩盡ける如く、夏は涼風起つて暑氣を忘れる。多々良沼の南岸及北岸は一面の松林にして清瀨漣波を呼ぶ。

城沼は南岸稍や高く面積五千百五十餘坪の處に蹣跚の古木約千株叢生し、桃林を

の東南に連り、唐紅の花香ふ頃ともふれば、漾々として藍より青き水に影を落とす。曉暎たつたの美云ふべからず、絶好の遊園地である。この高丘、躑躅ヶ岡又は花山と呼ばれる。

箱林町より城沼へは東へ二十町、板倉沼御手洗沼へは同じく二里、多々良沼中野沼へは東武線中野驛へ箱林驛より二哩半より十餘町、又近藤沼へは箱林町より三十町にして達する。







□ = #



第五篇 湖沼の趣味

第一章 湖岸の魔術

丸沼の水莊に麗かな朝が来た。菅沼に遊ぶまで養魚所の技手拂川氏に伴はれて出た。丸沼東岸の隙を喘いで攀ぢ、漸くにして菅沼の落尻たしじりに出る。

東西に狭く南北に長く湛えられた水、形は見えぬが太陽右に在つて、山間やまあひより投げた光線は、遙かに水面に落ちて彗星の尾の如く白光燦然きんぜん、紺青の水は遠くは眠り近くは醒めて唄歌ふ。拂川氏は沼の水を掬んで咽喉を潤ほし、其處に繫いであつた舟を解き、氏も乗り余をも乗せた。氏が靜かに櫓を漕こげば、舟は東端を差して迂り行く。南より東また北にかけて翠巒は波濤の如くにうねり、大小重疊ていとうして水に迫る、あれは島か之間へば岬ださ云ふ。彼こそ島だらう之間へば夫れも岬ださ云ふ。不可

思議なる窟の力働き、物の形を變へて異なる姿を現はさしむるのかと疑つた（第九圖A）。所謂北岐の北端は遠い遠いものでありながら、直ぐに前に近く見える。

水の色は飽迄で紺碧にして、大なる藍壺に舟を泛べたやうな氣がする。水の藍色なるは人をしてその心を靜まらしめ、冥想せしめ、崇高の念をさへ誘ふものである。また四邊の光景をして陰暗ならしめず華麗ならしめ、幽鬱ならしめず和樂ならしめるものである。菅沼に貫いたもの、一はまことにこの水色と言はねばならぬ。

舟は靜かに滑かに走る、舟の腹を打つて奏づるのは水の歌か、南歐の樂師はゴンドラに戯れる水の歌に和して、その樂器に指を觸れる。余は不圖エドガー、アラン・ポーの『The Domain of Arnheim』「アルンハイムの領土」に描かれた、不思議な舟遊を想起せすはあられなかつた。

右の方から突出した岬を一つ廻ると、南方は灣深く喰ひ込み、巨巖磊石岸を疊んで、物怖ろしげな洞窟さへ見え、千古の大森林は水近く蔽ひ、森林の上群峯を踏ま

へ颯爽と雲表に登えるものは、こゝれ白根山ではないか。連山はその周圍に偕伏し、いとも崇嚴な姿を示す（第一圖）。

東を望めば左右から延びた岬が狭い峽をなしてゐる。下辨天と呼ばれ、所謂北岐と中岐との境である。（第十九圖B）。下辨天の上直ちに突兀たる峯は、舟の進むに従つて何處へか隠れ、その下に丸き丘陵次第に長じて峯となつた（第十九圖C）。峽を通つて中岐に入る。駒鳥け縦に音を弄して、天上の讚歌を歌ふてゐる。深紅の一葉二葉水を覗いてゐるのは漆の木であらう。拂川氏はこの沼の紅葉の美を説いて頗る詳かである。

東南の隅に又峽が見える。舟が迂り迂れば北なる岬は直角（第廿圖A）崩れて水平線に合せんとし（第廿圖B）、遂にしなやかな手となつて南の岬と結ばうとする。この峽を上辨天と云ひ、その間隔僅に三間である（第廿圖C）。岬は一面青草に蔽はれ疎に生じた樹木の、配置や恰好のよき、人工を以てせる庭園だと云ふて、容易に人

を欺くことも出来やう。沼を隔て、駒鳥と鶯と啼き交す。霞を極め者を盡した貴公子と雖も、この時の余の歡樂を羨むに違ひない。菅沼の景趣は陰鬱的では無い、雄大では無い、しかし繊巧であり。諧調的である。心のどこかに下辨天を過ぎる。石楠花の咲きのこつたのが夢の花の如くに眼を掠めた。左手の岸には空を突くべき巖石が峙つてゐる。この水域は所謂清水江である。東岸清水平の草地を望めば、峰巒の出入、樹林の密疎、或は青草の褥、さながらに一幅の畫である、若しくは傳奇小説の舞臺である(第廿一圖A)。

暫くにして岸に着いた。淺瀬に舟を乗りすて、ヒラリと岸に飛移る。何やら知らぬ白い草花が一面に咲き乱れ、茅に似た草やクロバトに似て葉が濕地を包んでゐる。少許の草原は直ちに大森林に連なり、其處なる一道は日光道である。瀾流一筋これを貫いて沼に注ぐ、その水源は近く森林の中に湧き、草を除いて窺へば、二所相並んで苔蒸す岩の下、滾々と流れ出でる。差入れた指には氷よりも冷かに、含んだ口

には甘露より甘い。日本一に冷めたい水と拂川氏が言つた。

森林を遊歩すること一時間。再び舟に依つて南岸に沿ひながら歸路に向つた。淺きところ、水清くして底も窺はれる。白蛇の泳ぐかと怖れたのは白樺の沈んだのである。死魚の腹かき眼を背けたのは大木の枝であつた、すべて氣味悪く蠢いてゐる岸には石楠花の咲き残れる、淋しくはかなく、水中に倒れた樹の幹には苔を生じ草を立たせ、その草白き花を付けてゐた。寂然天地聲なき時頭上に駒鳥が聲を擡る。上辨天に近づくに従つて峽の間に丘陵二ツ三ツ轉がり出で(第廿一圖B)、連つて一の長峯となつた(第廿一圖C)。西岸の連峯もこの峽を過ぎぬ時は高く、過ぎてにはかに低くなる。下辨天の間から窺ふさ一の小屋が見える(第廿二圖A)。

舟は下辨天を過ぎて汪洋たる入江の様を北岐に入つた(第廿二圖B)。岩石のたなはつた南岸に舟を着けた。水中に乱立する岩石を傳つて、巖に望んだ小屋を探る。小屋は三間に五間。中に天壽大火鉢風呂桶散乱し、外に石楠花周つて咲く、巖上に

立つて下辨天一帶を眺むれば、團々なる巒峰十數は、悉く水に浮べる浮島の如く神韻縹渺として山も水も酔へるが如くまごろむが如く、幽寂身に滲みて、眞に仙女妖精の歌舞する境地である(第廿二圖C)。

再び入江の中を漕いで一の岬をめぐり、沼の落尻に舟をすてた。

菅沼は水色美はしきのみが貴いのではない。湖岸の出入多き事とその景致に複雑な變化を與へてゐるのを忘れてはならぬ、舟を右に進めても左に廻らしても、又東に走らせても西に迂らせても、軸の差す方面に全く新たななる、他と全く異つた絶景を發見するに苦まぬであらう。この沼に於ては水は靜かに止まつて、峯はみだりに動く、高く低くまた伸び縮み千變萬化する。しかもその色暖く柔かく、その形靜かになだらかである。されば菅沼の畫と詩とは、舟を縦横に操るこまによつて獲れる、平和の水、典雅な峯、これが果して深山裡のものであらうか。

第二章 大森林と沼

白根温泉の橋を渡つてからは、杖一本が力の山徑、足許に注意して進まれば谷に落ちる、朽葉を踏み行く氣味悪さ。

水の色は見えぬ、溪深く涼々の音を聞く。黒檜白檜椈などの大森林は、日を遮ざるばかりに枝を交へ葉を疊んで、山氣冷かにたゞよふのである。羊齒は大きく怖ろしく、山葡萄は蔓を張つて人をも巻かんとする。一抱も二抱もありそなたな大木が物凄く根拔ぎにされて、その谷に逆立つものは白骨の様な枝を尖らしてゐる。駒鳥や鶯が啼くがその音はあまりに寂しい。

溪の上を幾廻り、行けども行けども森林は盡きぬ。屢々熊笹が徑を奪ふ。四斗檜程なる太さの老樹が、脆くも倒れてゐる。絶て斧鉞を入れれば、樹も草も自然の儘に生じ、且つ朽ちる。太古の姿もかくやと思はれるのである。耳を裂き心を破つ

て鳥啼けば、おびえて足も進まず、しのびやかに雨が落ちれば、物の靈の歩み行く音を聞く。

万籟止んだ大森林の中で、突如流水の音を聞いた。徑の左手に小川が流れるのだと考へ付いたのは暫く後のことである。始めは夕立の襲ひ來たのかとさへ思つた。菅沼を中心とする一帯の詩趣を味はうとするものは、遠き古からある寂莫の裡に不意にこの流聲を聞いた時のことを、何時までも忘れぬに違ひない。

大尻沼にはもう近い、その出現を壯嚴にし、神祕的ならしむる警蹕の聲は、この流水の音に外ならない。

頻りに行先の樹間を探つたが、沼はまだ見えぬ。流聲がますます烈しく耳朶を打つた時、徑はその岸に導いて行つた。水は大尻沼から落ちて來る。約二三町程、小瀑連続して樹の根を浸し岩石を洗ふ。その色青しと云はんにはあまりに嚴かに、清しと云はんにはあまりに凄い。迂曲して激む時は青磁の陶器を洗つたが如く、奔

跳して音をなす時は綠柱石の勾玉を振るに似る。底深き處を覗きこめば、新たなる色素が底より浮み出でて水を染めてゐる。碧瑠璃の階段は、神堂の存在を語るものである。神堂夫れは大尻沼である。

白き霧の樹間に罩めたのかと思つた。その霧が漸く青味を帯びて來た。次の瞬間には、満々と溢えられた水の姿となつて、やがて沼の形や山の形が明瞭に眼に映じて來た。大尻沼である。

余は初めて世界の光を見たもの、やうに、何時までも水の面を凝視してゐた。押へ難い喜びが全身に漲つた。この喜びを如何なる言葉を以て表現しやうか。眞に湖沼を愛するものに非ずしては、とても同情し得ないものである。湖沼を愛する者の眼には、その最初の閃光には、戀に餓えた男の胸を射る女の一瞥よりも強い力がある。水を發見した刹那には、湖沼は宛ら活動体の如くに感覺に接する。それもホンの一瞬にして靜止の形に移る。また次の一瞬には永却に保たれた靜寂そのものを

見る。その時に眼を閉ぢよ、小我を脱して宇宙の靈體と交通するが如くに感ずるであらう。

湖沼に尊いものはまことにその最初の一闪光である。大沼も榛名湖も尾瀬沼も、先づ高きより之を望むが、大尻沼も菅沼も下より登り來りて之を仰ぐ、より多く嚴肅な感に打たれるのはこの故である。

水の落口で土橋を渡り、沼の北岸を辿る。その四圍は隙間なく樹木密生して、翠綠直ちに水に浸り、岸の水との界は頗る暗示的な一線を引く、墨を含ませたるが如くに濃き碧を溶かして一波騒がず、水色既に沈黙と靜止との象徴である。森閑として物の音一つ聞えず耳を澄ましたら湖心より如何なる囁きがもれるであらうか。

周圍幾許もい圓形の沼さ思ひ尙も進み行くさ、東方の岸が垂布の如くに二つに開かれ、新たなる水の光が燦然とまた、いてゐる。更に奥深く湛えられてあるのだ熊笹の間を歩き、細き一流を渉る。瓢箪沼と呼ぶのより推して、二つにくびれた沼

かと思へば、わが想像の甚だ愚かなりしを悔いた。又も東の岸は鐵の扉を軋らせて靜かに開いたのである、何と云ふ壯嚴な出現であらう。

舊約書を読む者は、その時、エルサレムの神殿は、庶民の禮拜する庭より進んで祭司の出入する聖所あり、更に奥に至聖所があつて、たゞ一人祭司の長のみ此處に近づくことを許されたことを記臆するであらう。大尻沼も亦かく別たれた美の殿堂である。

岸邊には藺が密生し、倒れ樹が水中に頭を突込んでゐる。水際の草の中には五頭の牛が遊んでゐた。その悠々たる姿がこの沼に應はしいものであつた。森林の奥で爽かな水の落ちる音が聞えた。

第三章 雨と霧

尾瀬沼は天候の變化の烈しい所である。一点の雲あれば忽ちにして雨降り、また忽ちにして晴れる。

尾瀬峠で雷鳴に脅かされ、入道雲に追はれた。峠の頂に立たば、燧嶽はその峰を厚い霧に包んで、森林の上に挺んでゐる。森林の中から三人連の旅人が現はれた。峠の下り道は何の雑作もなく、忽ちにして沼の見える處迄で来た。木の間を透かして水面を凝視する。鈍い不透明な感じのする色合である。森林を抜けて水の畔りに出るさ、水際の暗い草叢の中に菖蒲の花やカンソの花が咲いてゐる。歩一步花の数を増して行つた。沼の水は海の波が磯を洗ふ様に、靜かに砂地に寄せる。纏茫たる沼よ、僅に西北岸に燧嶽が天を突き、水に足を洗はせつゝある外、西も南も岸邊は遠く低く、東岸は白砂を敷いて森林を隔てゝゐる。晴れたる空、陽に輝く湖面は

どうであらう。しかし空は雲低く水は灰色にくすんでゐる。

中空に鷹が飛ぶ、草原と云はず木陰と云はず、襪紅色の布を延べた如くにカンソが咲き乱れ、菖蒲の濃紫と石楠花の淡紅が、之に美しき模様を置いて足を踏み入れるを躊躇せしめた。水面に丸い葉を浮べてゐるのは蓴菜である。

林の中を熊笹を押分けて泥濘に踏込み、シメムくした草地を過ぎて森の奥に入ると、新築の平屋があつた。長藏と云ふ老人が獨力でこの沼に鱒を養殖する爲に建てたのである。家の裏は直ぐと沼である。下駄を借りて足を洗ひに行く。飯を焚くにも風呂を沸かすにも顔を洗ふにも井戸はなくて、沼の水を用ふるのである。水中に井守が動かすにゐた。

茶を呑み御馳走振りの源氏豆をつまんでゐる中に、雨が降り出した。森の中でマムと葉を打つ音が寂しい。池の面はますく灰色にけぶる。前に聳える燧嶽は霧の去來に所定めず緑の肌を露はしてゐる。ある時は胸に、ある時は肩に。

遙か西方の岸に尖つて見える景鶴山も隠れてしまつた。時とすると水面が鈍い銀光を放つ、雨がまた降り出した時、波立つた間に二羽の鴨が浮いてゐた。しばらくして雨足が上ると夕日がキラ／＼と映つた。それも瞬く間に消えて濃い灰色の水に歸つた時、燧嶽の後から美しい黄金の線がサツと水面に走つた。山も沼も雨に薄くぼかされながら夜に入る。風の音が家をめぐつて過ぎた。

蚊に攻められて一睡も出来なかつた。風のためにしばらく魂がびえる。何ものか忍足に近寄る音が聞える。しかしそれは老人の畜犬であつた。一枚雨戸を開けた所から冷かな空氣が流れ込んで、其處から窺ふ空は乳色から淡青にかはり、また乳色にかはつた。

睡られぬものには夜の明けるのが待遠しい。夜は憎らしいほど明けなかつた。

湖上に星が瞬き、水面稍や明るくふつたのが、例の雨戸の間からわかつたので、靜かに戸外に出て森の中に入つた。霧の深い朝である。木立の間には白い綿を充し

たやうに、一間離れるとすべての物の形が怪しく、十間距るゝ幽靈の如く、一町遠ければ別の國にかくれる。沼も見えず山も見ぬ。

全く明け放れたので沼へ顔を洗ひに行く、霧は軍馬に蹴立てられた砂煙の如く、勢銳ごく此方に押寄せて來た。岸近くになるさくる／＼と巻いて天上する。燧嶽は霧の中に出没してゐる。森の中で鳥が啼いた。空は次第に桔梗色になつて匂ふばかりである。

湖面の霧は左に這ひ、燧嶽の霧は右に逃げる。瞬く間に湖上一面霧の世界となつた。厚い帳が切れ出すと、再び朝が來たやうである。水は淡青に靜寂の姿を現し、空は低き所は紅に、や、高くして紫に、而して岸は綠に砂地白く、天地は五彩に輝いた。

暫くすると、空は下に淡き紺地の布を張り、赤を重ね黄を積み、白くかすんで青くたゞえ、新たなる五色の玉を湖上にかざした、日光を吸ふて霧も赤く燃え出した

巖嶽は濃緑な山容を嚴かに示し、色彩の合奏は微妙なる諧調を湧き立たせてゐる。
霧全く湖上を去つて後、この沼と別れた。

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading and ghosting.)

第四章 大沼の螢

新坂峠に立つと、何ものかを抱いてゐるやうな峰々のたゞすまい。林に入り林を出る。身に泌み渡る静寂の氣に貴い洗禮を受けて、靜かに靈場に近づいて行つた。神殿にもゆる蠟燭のやうに、白樺の樹が枝をひろげてゐる。駒鳥は麗音をほしいまゝにし、その銀鈴の響きが林の奥に消えた時。眼を射た光がある。樹間より大沼の水が見えた。

曇檜の腕にありて、安らかに眠るが如き水。いさゝかの汚れもなき深碧の色を溶かし、この峰の裾からかの峰の胸に絹布をかけて、神聖なるものを俗界より隔てた如く、恐怖を感じるばかりに森然としてゐた。

はじめて赤城の大沼をのぞいたその時より、湖沼の讚美者となつた。何年か前の

印象を再び深く鑄りこみたいそれがつたが、新坂峠を攀ちた頃は、悲しやもう黄昏近くであつた。

その日東京から来た友人の、IとTとの二人を前橋に迎へたのが、朝の九時、山路に慣れぬ足なら、大洞に着くのは遅くふらうから、一夜を此處に明して、明朝早くのことにしないかとすゝめたが、二人は横に頭をふつた。その故である。

今までその底を這ひ上つて来た谷を見下ろすと、氣味悪くさわめてゐる。左にのぞむ禿山は橙色に燃えてゐた。

空は青ざめて、はじめて眼に入つた山々のうねりには、暗い蔭がまつはりかけてゐた。細くたよりのない道さへ何處へか消えそつである。

「此處まで来れば大丈夫だ、ともかく急がう」

と二人の顔をのぞくと、後悔の色は蔽ひかくすことができなかつた。夕闇は刻一刻濃くなつた。

「すまないけれど……手を引いてくれないか」

さ心細げに言ふIの聲に驚かされた。折も折、Iは眼を患つてゐて、黄昏時になると文目もわからぬ不自由さ、さりとてさやかう言つてゐられる時ではない。洋傘の柄をしっかりと握ませ、余は他の一端を握つてさぼく引いて行くことにした。こんなことで氣ばかり急いても道ははかざらぬ。

もう全く夜さなつた。木も見えぬ山も見えぬ。たゞ闇の一色に塗られてしまつた遠い谷で鳥の啼いてゐるのも悲しい。「こゝらを歩いて行けば」さ覺束ない足取をして下つて行つたが、どの位歩けば湖水の縁に達するのやら、達してから旅舎まではどの道をすればよいのやら、案内者自身ももう少しも見當が付かぬ。

どつちを向つて進めばよいのやら、それさへわからなくなつた。猛獸に出逢ふ虞はないとしても、こんな深山路の夜歩きが危険至極なことは知れてゐる。考へると心細くて泣き出したくなつた。いよいよ迷兒となつて救ひを叫び求めればならぬか

と思ふた刹那、總身冷水を浴びせられたやうに戦いた。その時不意に「ガサ／＼」と草がはげしく搖れて、眞黒く大きな物体が飛び出した。三人は思はず、

「キヤツ」

と叫んで一方の草叢に轉がりこんだ。怪物は谷間の方に彈丸の如くに疾走したので、ホツと一息吐いて

「何だ馬ぢやないか」

こうして脅かされた後は、尙更ら臆病になつて、たゞ／＼と足もすくむで動けない、見るさま、平らに傾いた草原があつて、その果てに眞黒い木立がつゞいてゐる。どうやら湖水の岸らしい

「彼處に行つたら道が見付かるかも知れない、一寸見て來やう」

と二人を其處に待たせて、草原を駈け下つた、氣になつて振りかへると、二人の姿は暗にのまれて見えぬ。

「オーイ」

と呼べばTの聲で

「オーイ」

と微に耳に入る、また一散に走つて行くと、草原は急に断たれて谷に落ちてゐる。一心になつて谷底をのぞけば、白く長いものが横つて見える。うれしや道があつたかど、飛び立つ胸を抑へてなほよく瞳を定むれば、道ぢやない。白樺の大木が倒れてゐるのだ、がつかりして思はず腰を落した。と涙が滲み出た。

この山中に、草を枕とし露に濡れて、一夜を明かさればならぬか、さんでもないことになつたと、草の上に身を投げやうとしたが、二人のことが案じられる。いそぎ跳れ起きてさつて返しなから。

「オーイ道はないぞー」

余の聲は顯えてゐた。

「そうか」

と答へたTの聲もうるんでゐた。見るに聲のする邊りから遠からぬ所に、白いものがフロリ／＼と浮いてゐる、人魂のやうに浮いてゐる。

「人ではないか？」

と突嗟に頭に閃いた。躊躇してはゐられない、二人の方に向つて

「誰か通るやうだ、道を聞いて見ろ」

「ヨシ」

といくらか勇みたつた聲が聞えた。余も猶豫なく、

「モシ／＼猪谷に行くのなら、一緒に連れて行つて下さい」

と咽喉をしばれば、思ひがけず若い女の聲で、

「早く此方に行らしやい」

山中の夜に若い女の聲、不思議と怪しむ餘裕はない。白い姿をのぞんで夢中にな

つて駆け寄つた。IもTに手を引かれながら、息を切らして馳せて来た。

見れば尙ほ不思議、妙齡な西洋婦人が二人、屈強な男の案内者を伴ふてゐた。余等三人の喜びは如何ばかりであつたらう。感謝の言葉は溢れ出でて止まなかつた。

「あゝあゝ、助かつたネ」

と余等は相擁して互の無事を祝した。

「提灯を点けませうか」

と案内の男は言つた。提灯の火に危い道を照らさして林の中を進んだが、助けられた嬉しさは身を躍らせるばかりであつた。

わが恩人の話を聞けば、かなり急いで来たが箕輪で日が暮れかゝつたので、其處で案内を雇つたのだと云ふ。一人は流暢に日本語を操つたが他の一人はそれほどにもない、二人とも二十歳前後が快活な人達で、いろ／＼話しかけ、戯談を言つては三人を勵ましてくれた。

「天使に助けられたさでも云つたやう形だ子」

と余がIに言へば早速聞きかめて

「何、天使ですつてオホ……」

とすゞしい聲音でうち笑ふ。もう湖水の邊だ、

「螢—螢—」

と婦人の一人は叫んだ、一同の眼は一齊に青い火の玉を追つた。木の間を縫つて飛ぶ虫の光りは、不思議に美しい色を持つてゐる。二ツ三ツ星の如くに流れ、糸を引き緩を結んだ。下にはヒタ／＼と岸を打つ水の音がきこえる。

此處は赤城の沼ではない。物語の中の湖である。さなくば此處は遠い南歐のとある湖邊である。……余はいつものやうに空想に落ちた。

後になつたIがばたり木の根に躓いて、たやすくは起き得られなかつた。近寄つて抱き起こし、さまざまさいたはつたが、もう餘程疲れてゐるらしかつた。全く無

理もないことだ。婦人は案内者の背負つた荷からパンの塊を出してIに與へた。Iも余もパンの御相伴に與り、空腹を一時凌ぐことができた。かくして猪谷の宿に着いた。

三人は二階の廣い座敷に導かれ、二人の婦人は廊下を隔てた向ふの座敷に入つた。安心するさ急に疲労が出て、暫くは横になつたまゝ身動きもしなかつた。深山の奥湖邊の家、木の葉のそよぎも水のさゝやきも耳に入るかと思はれ、峰に圍まれた眞暗な湖上を想像すると、奇怪な空想は盡くるとしもなかつた。

湯に入つて疲労を去り、だらしなく臥して繪具箱などひろげてゐると、婦人の部屋からは、耳慣れぬ美しい笛の音がきこえた。その部屋は湖水に面してゐる。余はまた空想に沈んだ。

疲れてはなすが眠れない、時の歩みも心にはさまらぬ。闇に浮く白衣—湖上に流れる螢の光—美しい笛の音、神秘的な湖畔の夜は眠るにはあまりに惜しい、安らかに

な眠りの夢とても、かくばかりは美くあるまい。そつと床を抜け出で、障子を明けた闇を透かして見るこ、一抹の薄墨色をばかしたのは物置の屋根らしい、と音も立てずに稲雷が閃いて、その屋根を青白く描き出し、瞬時にして消えた。急に湖水が見たくなつて足音を盗んで台所に下り立ち、繩緒の下駄を拾つてつつかけ、水邊を思はるゝ方へ靜かに歩を進めた。

風もない夜、おとなしく枝を重れた木の葉はしほらしい。尼院の庭をひさりさまやうな心になつて、我知らず胸を抱いた。夜の湖上にたゞよふ微光は。原始的のものである。世界の末だ生れ出でぬ前、宇宙に瀾漫してゐたものである。神が「光あれ」と宣へば、こゝに大いなる輝きが現はれる。

空は曇つてゐるか星影さへかくる。峯高く水低く、霧は之を閉ぢて動くこともなしに動く、永遠の無言と靜止、それは死よりも怖ろしかった。けれども岸の砂をもてあそぶ微妙な音に耳を傾けてゐるこ、なつかしい思ひが胸に湧く、そしてはてしも

見わかぬ湖面に眼をやれば、亡き母を憶ふやうなしたはしさを覺える。心ゆくまで泣きたい、さふくば聲低く歌うたひたい。人あつて彼方から我を呼んでゐるやうだ……

日本語の流暢な婦人の名は飯塚アリス、日本人を父に獨乙人を母に持つ、他の一人は生粋の獨乙人である、さ後に宿の男から聞いた。

第五章 水莊記

利根郡片品村の千明賢治氏は菅沼丸沼大尻沼で鱒を養殖し、附近の山に牛と馬を放牧してゐる。丸沼北岸の平地に別荘と養魚所がある。その別荘にある日草鞋を解いた。

別荘は沼を距ること一町、その西に養魚所連り、峰高く之にかぶさつてゐる。今や丸沼は眼前にその全景を展げてゐる。圓形なる小沼である。いと高き翠巒は東より南より西よりこの沼を圍繞し、寧ろ壓縮せんとしてゐる。水の色、世にかゝる純粹に綠色なるものがあらうか、山嶺の其の影を落すや、水は悉く之を受けて一線一点も捨て去らぬ。岸なる樹木と水なる樹木とは一直線に連る。世にかくも完全に岸の影を映すものがあらうか。水は動かぬ、深緑の岸は尙ほ動かぬ。水の奥は暗い、暗い中にぎう／＼と高く鳴るものがある、八町瀧の音だ。

「この奥に温泉があります」留守番の青年が云ふ。

借りた浴衣を着て、繩緒の下駄を突掛けて別荘を出やうとすれば、周囲の埒の上から數頭の牝馬が頸を延べ出してゐる。可愛らしいけれどもいさゝか怖い。

平地と云ふのは峰と峰との間に細長いものである、その窮まる所木立の中に一棟の小屋がある。これは浴場を外に人家はない。さまで熱くはないが、甚だ澄んでゐて氣持がいゝ、湯に浸りながら睡つてしまひたく思ふ。湯は上の樋からぎう／＼と落ちる。

湯から歸つて丸沼に舟を浮べ鱒を釣つた。釣道具は竿とすつぽん釣りの糸とである。舟は滑かに水上を這つて湖心に浮んだ。唄を知るものはこの時必ず唄ひ出づるであらう。節高くして調子沈痛なる唄を唄ひ出るであらう。水は濃き綠色にして底

餘りに深きためか、俯し窺ふも何物をも認め得ずして恐怖を覚えしめる。水上には一点の塵芥も浮ばない、巨漢あり、聖き水を壺に盛つて天に捧ぐるものであらうか。美人を乗せて浮ぶ舟を想像することができなかつた。無人島の奥に千古の夢をむすぶ湖はかくもあらう。如何なる秘密や潜むと乗り出す舟、それより外に想像することができない、菅沼は東の峰の胸百餘米の高さにある。と考へるだけでも物凄いの。すつぽん釣りと云ふものは舟を行りながら試むるもので、長尺の糸に錨形にして蚊鈎の如き鈎を付し、その上部に圓い鐵葉の小片を結び、糸は棒に巻いて、この棒を廻しながら糸を水中に送り、印の附いてある所まで入れて止め、靜かに舟を進める時には、件の鐵葉の片は水中にあつてクル／＼廻轉し、恰も虫あつて動く如く見えるので、鱒は騙されるさ知らず食ひついて鈎にかゝる。

小さい沼の様でも舟を漕いで見ると頗る岸から遠い、漸くにして沼合川の口に來た、水に沈んだ樹が枝のみ突出してゐる。是に舟を繋いで棒を廻し糸を引くと、銀

の腹に淡紅の点を一列に連れた、美麗な虹鱒が掛つてゐた。

青年はバケツに水を汲んで竿を取上げた。鈎は悍猛な蚊鈎で、綸を垂れて浮子の動くのを待つてゐる様も悠長なのではない。流口に向ひ竿をヒューと鳴らして綸を投げる。而して鈎を水面に浮せながらツツと竿を引くと、鱒は素早く道かけて鈎を呑むのである。忽ちにして三四尾釣つた。この時日はもう大尻沼の峰陰に落ちかゝつて、水の上を這つて來た柔い光線が、靜かに舟を呑むた。

もう暗くなり過ぎたと云ふので、舟を大尻沼の方に進めた。流口は非常に淺い。丸沼の方は摺鉢の底の様に急激に深くなつて、その急斜面を舟に驚いた鱒が矢の如くに下る。沼合橋の下を過ぎてからは水淺く、髯の如くに長い水草のために舟が容易に進まぬので、青年は水に入つて舟の後押しをした。頻りに小魚が逃げ惑ふ。大尻沼に來ると淺い所に立つて釣る、面白いほどよく釣れた。日は全く落ちた、舟をめぐらし夕暗の中を漕いで歸る、岸に立つて顧みると南の峰の上に黄色い月が黒い

水面を覗いてゐた。

二階に上り寝椅子に身体を投げて夜の沼を見る。山も黒く水も黒くたゞ一つ色に融けんとする。一色それは神祕の色である。今日迄では青色を神祕の色と呼び來つたが、今にして漆の様な黒さから神祕の怪鳥の翼を擴げて飛び立つのを見た。黄色の月は天を割する壁の頂を這ひ、恰も沼の暗黒に脅かさるゝ如く、微かに覺束なき光を投げて逃る。幻想に陥り易い余は、湖水の暗黒に吸ひこまれて奇怪な世界に迷ひ入つた……

侍女が云ふ「月が怪しく輝いてゐます。身体を包もうと經帷巾を探してゐる死んだ女の手のやうです」

侍従が答へる「不思議な面差の月だ、琥珀色の眼を睨る若い姫のやうだ、薄紗の雲を隔て、若い姫のやうに微笑んでゐる」

侍女は侍従に戀してゐた、侍従は姫に戀してゐた、侍従が戀に破れて自殺すると侍女はよゝ泣き伏した「わたしが香をこめた小宮と銀造りの耳輪を贈つたその方は、自ら我が身を亡きものにしてしまひました。御自分でも何ぞ禍事が起ると云ふてゐたのに、わたしもまたそふ云ふてゐたのに、その禍は來て、そして過ぎ去つてしまひました。あの月が骸を探してゐるとはよく知つてゐたけれど、その探してゐたのはこの方であるうとは思ひませんでした。あゝ何故月に秘して置かなかつたらう。洞穴の中に庇ふて置いたあゝ、よもや月も見つけはしなかつたでせうに」

第六章 湖沼の傳説

一 龍のお姿(小沼)

輿の中なる乙女が水を欲しいと云ふ。

「と仰やつても溪には遠し……」

侍女の一人はあたりを見まはした。眞晝の日に綠葉がてらくと光る。露一滴含んでゐない。高い峯の脊に小さい黒雲がほかき浮んだ。

「それぢやさて、苦しうてならぬわいな」

乙女の聲は悲しそである。侍女は谷底までちやと一走りと、裾を端折り足を踏出した時、輿の簾が軽くあがつた。年は十七、その顔は凄いと美しく、もろくの地の花もおのゝくであらう。

「藤江まちや、あそこに水が」

黒雲の浮んだ峯の陰に、青い一條の色、青いさ云ふよりも黒すんだ水の色、侍女は見るさげしくおびえたが、乙女はさも嬉しげにそばくと輿を出やうとする。驚いて侍女達が、

「あれは沼でござりまする」

おびえたのもここはりかふ、この山の小沼と云へば、底は幾尋、淵よりも恐ろしい。侍女の言葉も、侍女の手も、それはかひなく流れて、輿にはもう乙女の姿は見えない……たけの黒髪房々さ地に曳き空に躍つて、紅の裳裾は草葉にもつれる。

「あれ！」

とお主の身の上を氣遣ふよりも、侍女の眼にはあの黒髪が恐ろしいもの、様に狂ふて見えたのだ。

沼は乙女を待ち、乙女は沼を尋ねてゐた。水畔に兩の膝を折り、雪の掌に玉のや

うな水を掬んで口に含めば、落ちたか投げたか水は乙女の肌をのみ黒髪をのんだ。
こけつまるびつ追ふて来た侍女は、

「姫様おあぶない」

と叫ばうしてそのまゝ、氣を失つた。介抱されて正氣に歸つたその侍女の言ふことに
「姫様は龍のお姿にならしやつて、水へお沈みなされましたわいな」

峰の脊の黒雲は消えた。沼の水は鏡のやうに澄んでゐるばかり、水畔に伏して侍女達が泣きわめいても、情ない波のさゝやきは知らぬと云ふ。乙女がこの世の形見にこそか、岸に残した緋の衣をしつかと抱いて、侍女達はしほく山を下つた。

赤城山の南の麓、赤堀に居を構え、北は山南は小保方まで領土をなし、権力飛び鳥をも落さず豪族赤堀道玄も、最愛の娘の横死を聞いて、さすがに粒のやうな涙を落した。母の悲嘆こそ哀れである。掌中の玉といつくしむこと十幾年、不思議に怪しまれてならぬことが二つあつた。乙女の脊には生れ落ちた時から、蛇の鱗のや

うなものが付いてゐた。娘は云ひながら氣味わるく思はぬでもなかつたのに、今ならば日の三時頃、きまつて山に向つた一間にひさり、襖も閉し父さて母とて中に入れなかつた。何してゐるのやら誰にもわからない。——今にして母の長い間の謎が悉く解けた。娘は小沼の主になるために生れたのであらう。さなくば小沼の主が假りに人の姿を借りて現れたのであらう。

まもなく赤堀の家には、蛇体の位牌が佛壇にふえ、小沼の岸には一字の堂が建てられた。堂の中には乙女の形見の衣が密めてある。その後堂は焼けて、緋の衣は今もなほ田澤の普陀落寺に残つてゐる。

二 犠牲の美少女(大沼)

大沼の主には犠牲を捧げなければならぬ、その犠牲は見目美はしい少女でなくてはならない。

そう云ふ時が五十年目毎にまはつて来る。えらまれた少女を夕暗の中に岸邊に立たせて置くと、砂を洗ふ小波が、よろこびの歌をうたうやうにきこへる。沼の奥から狭霧が流れ来て、水の面を包みまた静かに峰へ這ひのぼる。拭ひきよめた沼の水から、清らかな音楽のしらべがきこへて来る、しかし少女の外には誰も聞えぬ。と小鳥ヶ島のほそりから濃い霧が浮かあがつて、また、く間に少女の姿をかくしてしもう……

沼の主は鯉である、何百年何千年を経た大きな鯉である。島の近くにその棲所があるのだと云ふ。

犠牲の少女を出すのは、昔から沼のほそりにある一軒の家にきまつてゐる。

三 腰元蟹(榛名沼)

大勢の腰元どもよ、お身たちは何をそのやうにわめくのか。

「あれみやしゃんせあの湯は

藤波さまがいさしさに

岸のあやめのまねをして

こゝろこゝろと描いてゐる」

乱心した腰元の一人が、舟の中で狂ひながら歌ふのであつた。わめけど狂へど、藤波はもう水の底から歸りはしない。いかに長者ださて、水に落ちた一人娘を、救ふことができぬまは、さてもふさけふいではあるまいか。

舟遊びをおすゝめしたのは誰であらう、よしないことをしたばつかりに、天にわびても氣がすまぬ。腰元は一人のこらす、舟から湖水へ飛びこんだ。飛びこんでも死にはせず、みんな蟹に形をかへて、藤波の行方をさがしてゐる。

山に嵐が起つて、梢はふれた病葉が谷一杯に埋まるさても、榛名の湖には塵一本も浮べてゐない。お主をしたう腰元蟹が、すみからすみまで清めるからだ。

四 立田の返討(榛名湖)

「龍若、龍若」

さかすかに呼ぶ聲がきこへる。龍若丸はガバと跳れ起きて、闇の中を屹と見つめた。

「お、母様か、おなつかしうござります」

と縋り寄らうとすれば、闇の中なる人影は何故か後すざりする。龍若丸は悲しく、

「母様、母様、かたきは屹度討ちまする」

と両手をついて聲音も凜々しい、かの人影は淋しい笑を浮べて、掻き消すやうに見えなくなつた。龍若丸は今宵もまた亡き母の夢に驚かされたのである。

父の最期、それにもまして母の横死は龍若丸には無念でならなかつた。おのれも武士の子と生れて、やはかこの仇を報ひすに置くものが、今に見る、この及に血のつてくれると、南の空を睨んで唇を噛むのであつた。

奥深き榛名の山の隠れ家を出て、湖のほとりに立つことが、いかげかりうれしくあつたらう。母の美しい遺骸のおくつきはこの水底である。そのたましひは今も清らかな水の上をさまようとしのばれてならない。なつかしさに夜も晝もこゝにたづねては来るが、なつかしきはやがて憤りの涙をさそふのであつた。

父の木部宮内少輔忠近が、白井の城主山名大膳重友に攻め破られ、非業の最後を遂げたので、やうやう城を落ちのびた龍若丸母子は家臣の矢倉朝賢に助けられて、この山に難を避けてゐた。

母の名は立田、世に稀れなる佳人であつた。まだうら若き身を、錦をつゞれにかへて、湖のほとりに草の庵を結び、龍若丸の成長をたのしみに、己が瘦せるも忘れてゐた。ある年の冬十二月、この庵に一時の休息を求めた武士数人、何れも獵姿で中にも主と見ゆるもの立田が美貌に眼奪はれ、はじめはおとなしく酒の酌などさせてゐたが、酔がまはれば氣せはしく、己が意に従はせやうとするのであつた。言葉

に立田のなびく答はない、体よくあしらひうべなはぬを見て、あくまで迷つた武士は鼻を蠢かし

「こゝ野暮に見えても、實は白井城の主ちや、素直にはいさ云へば、あすからは俺の奥、それでもいやか、ごうだ、はいさ云ふて呉れぬか」

さては響敵山名大膳であつたよふ、こゝでめぐり逢ひしは幸ひ、女でこそあれ、夫の敵逃すものか、覺悟せよ、と健氣にも懐劍抜いて斬りかゝつたが、櫻の枝で大地を打つ、花は散らすに置かれぬ、あはれ玉の肌はだに返討の刃は深かつた。けれど立田は、骸せがらになつて大膳の足蹴にさるゝは口惜しと、千万の怨をのんで水に飛び入つたのである。

美しかつた母のおくつきは、水も清き湖である。龍若丸にはなづかしさもなつかし、復讐の念を燃えたすのこの湖である。

復讐の日は遂に來た。大膳は伊香保に於て、龍若丸と朝賢とのために見事首をはねられた、立田湖みづうみに沈んでより二年の後である。

五 お辻の方(城沼)

城沼の岸邊、躑躅ヶ岡の躑躅は新田義貞の寵妃、勾當内侍の手裁てんざいに起るとか云ふが、こゝ暫らくは史蹟の詮議は止めにした、事實はともあれ、傳説の美しさを繪てられぬのである。

お辻と云ふ館林城主の妾が、城主の一方ならぬ寵愛をばかうむり、唯一人羨まぬものはない、それを見るにつけ、奥方の嫉妬は日につのり、責め呵むでも腹は癒えぬ、お辻の柔肌やわはだに生傷は絶えなかつた。美しく生れたものは何故泣かればあらぬのか、美しいものは何故かくもはかないのか、お辻も同じ謎なぞに惱まされて、遂に沼に入つて死んだ。

里人はみんなお辻のために涙を惜まなかつた。そのあはれに美しい一生を弔ふてやりたいと、沼の南岸龍燈松の陰に一株の躑躅を植えた。お辻にふさはしい名の花である。

お辻は愛妾ではなく、奥方だと云ふものがある。ある日奥方は大勢の腰元をつれて、この沼に舟遊びをしたことがある。するとどうしたところか急に舟が動かなくなつた。舟の中の誰か一人、沼の主に見こまれたにちがひない、だれもかれも持品を水に投げて、もし沈んだものがあれば、その品の主が見こまれたのである。かなしや沈んだ品は奥方のものであつた。けれども奥方はけなげにもみなのためわたくしが死なうと云つて、さんぶと水に飛び入つた。とひさしく舟がする／＼と動きだしたのも不思議である。

腰元は城にかへると委細を殿に申上げた、殿は日夜嘆きに沈んでゐたが、奥方のお辻と云ふ名にちなんで、丘に躑躅の樹を植えたと云ふ。

六 鱗三枚(榛名湖)

榛名の山の頂には、奇しくあやしい湖があつて、湖から程遠からぬ岩陰の御社はあらたかなる神靈と聞く。木部宮内少輔の奥方は、その御社に詣でたいと兼々のぞみであつた。

「まことさけはしき深山路でござりまするほどにきつと思ひ止まりませ」

とお傍近く仕ふるものは、言葉極めて諫めるのであつた。それにはわけがなくてはかなはぬ。奥方は常日頃、童兒に戯るゝをこよなく楽しみとせられたが、そう云ふ時、後より窺へば、そのお姿が時々龍体に變ぜられるのを見るのであつた。不思議な奥方である。奥方の御正体は龍でおはすか、龍でおはすなれば怪しき湖近くを過ぎて、異變はしあつてはならぬと、それ故にお諫めするのであつた。

けれどさすがの家臣達も遂に奥方の言葉に負けて、山にお供せなければならぬ

なつた。きらびやかなお駕籠は靜に山路を登つて行つた、此處ははや湖の畔である
「駕籠を止めよ」

と命ぜられて、藤たきお姿は水際に近づいて行つた。何の汚れか、水に手を洗はせられる。さ如何なるはずみか水中に落ちさせられ、底深く沈みはてた。從者は皆な色を失つて、己が死ぬると云ふことよりも、その驚きは更に強かつた。徒に渚にうるたへ騒いでゐると、遙かの沖なる水にはかに卷上つて、恐ろしげなる龍かめつくと立ち現れた。魂も消ぬべく懼れ伏した從者の耳に、奥方の聲音で、

「疾く疾く歸れよ、歸りて之を弔へかし」

さその脇の下より鱗三枚を取つて與へ、奥方の化身なる龍は再び水中に沈んだのである。

奥方の名は善女、箕輪の城主長野信濃守の息女である。少輔との間に儲けた一子

は善導寺の空寂上人の弟子とあり、後に圓光上人と稱した。從者の携へ歸つた龍の鱗は善導寺に於て弔ひ、今だに寺の寶物となつてゐる。寺にては供養の爲にとて毎年四月二十日(善女の水に沈んだのは明徳四年四月二十日である)、白木檜の櫃に赤飯を盛り、數日齋戒沐浴の後、僧侶自ら湖に携へ行き、舟に乗つて湖の中央に至り櫃ふがら之を沈めて龍神に獻するやうになつた。若し水中に沈まぬことあらば、これ龍神の受けさせられぬのだとあつて、更に前の如くにして獻じた。

その善導寺と云ふのは、吾妻郡原町大字紺屋町に在る。吾妻太郎の家臣なる川戸城主(月出城)秋間泰則の建立にかゝり、開祖は西山空寂即ち空寂上人である、庫裡の後は一帯の山にして、上るこゝ三町許り、老杉の間に一小池を湛じ、邊に苔蒸した碑が立つてゐる。これぞ善女の碑で高さ三尺表には「寶池院、廣雲伏龍善女」その右に「天下和順」左に「日月清明」と刻み、右側面には「上州箕輪城主長野信濃守娘

也、俗姓木部宮内正輔奥方也、明德四年甲戌四月廿日、當山圓光上人御母、又左側面には「再建嘉永三年庚戌四月廿日當山廿八法譽代、施主新井善兵衛」と記してある。善女は嘗て來りて此の寺にあり、その時生み落したのが圓光上人である。湖に赤飯を沈めて供養する、こは今は五月五日に之を行ふてゐる。

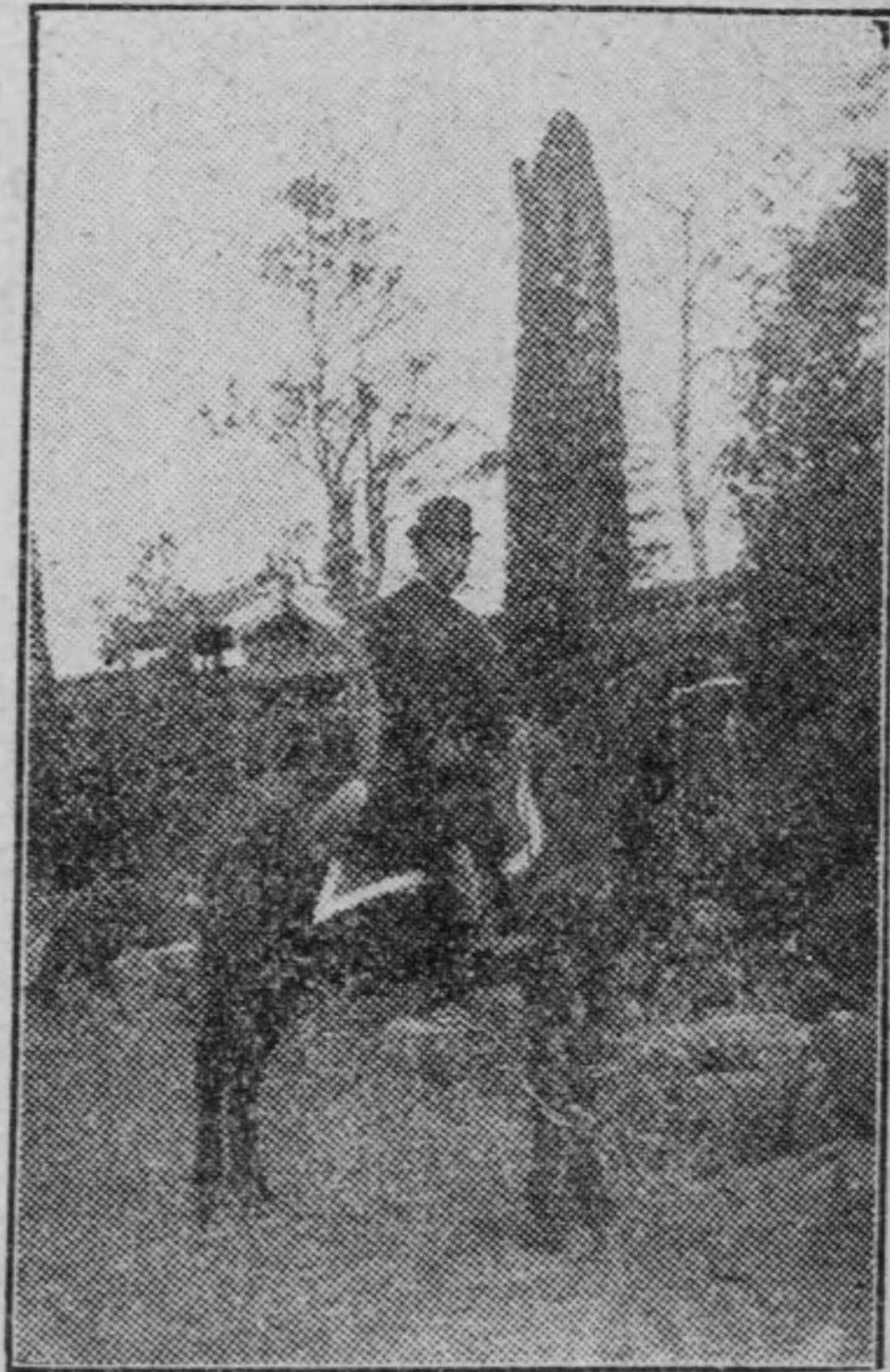
上毛山水志（終）

前橋電車

- 赤城連山の雄姿を望み利根の大流に臨める
沿線一帶の風光は本社誇りとする處也
- 伊香保前橋間直通運轉を爲す
- 上野伊香保間は連絡切符を發賣し賃銀時間
他線と全額也

利根發電株式會社

前橋市堀川町六十五番地
電話六三番、六四番、六五番



群馬縣北甘樂郡馬山村大字馬山
 蠶種製造家 岩井龜太郎

利根名産

錦石 (一名 赤石)

一、産地
 用途

利根郡水上村大字藤原村字芦澤
 建築用材

洗面盤
 洗面器
 洗面台
 洗面石

手洗鉢
 手洗鉢
 手洗鉢
 手洗鉢

印洗鉢
 印洗鉢
 印洗鉢
 印洗鉢

火破片
 火破片
 火破片
 火破片

此破片を以てセメントの上
 此破片を以てセメントの上
 此破片を以てセメントの上
 此破片を以てセメントの上

花形模様を磨き出したるは
 花形模様を磨き出したるは
 花形模様を磨き出したるは
 花形模様を磨き出したるは

壁間敷に應用して最も妙なり
 壁間敷に應用して最も妙なり
 壁間敷に應用して最も妙なり
 壁間敷に應用して最も妙なり

各國に流行す
 各國に流行す
 各國に流行す
 各國に流行す

錦石の特色は磨擦の度を重ねれば
 錦石の特色は磨擦の度を重ねれば
 錦石の特色は磨擦の度を重ねれば
 錦石の特色は磨擦の度を重ねれば

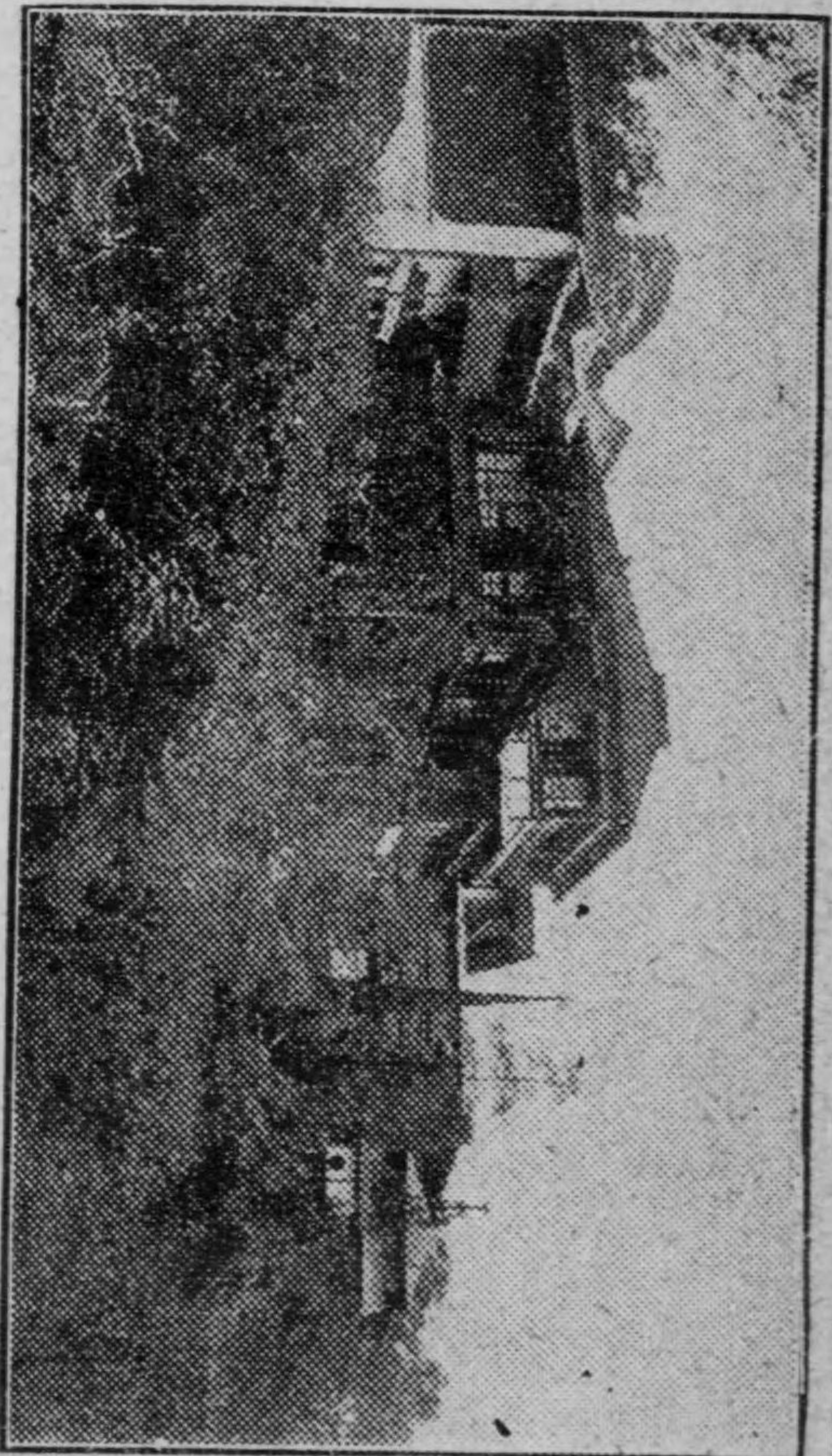
し鏡の如く物を寫す
 し鏡の如く物を寫す
 し鏡の如く物を寫す
 し鏡の如く物を寫す

前橋市曲輪町百五番地
 前橋市曲輪町百五番地
 前橋市曲輪町百五番地
 前橋市曲輪町百五番地

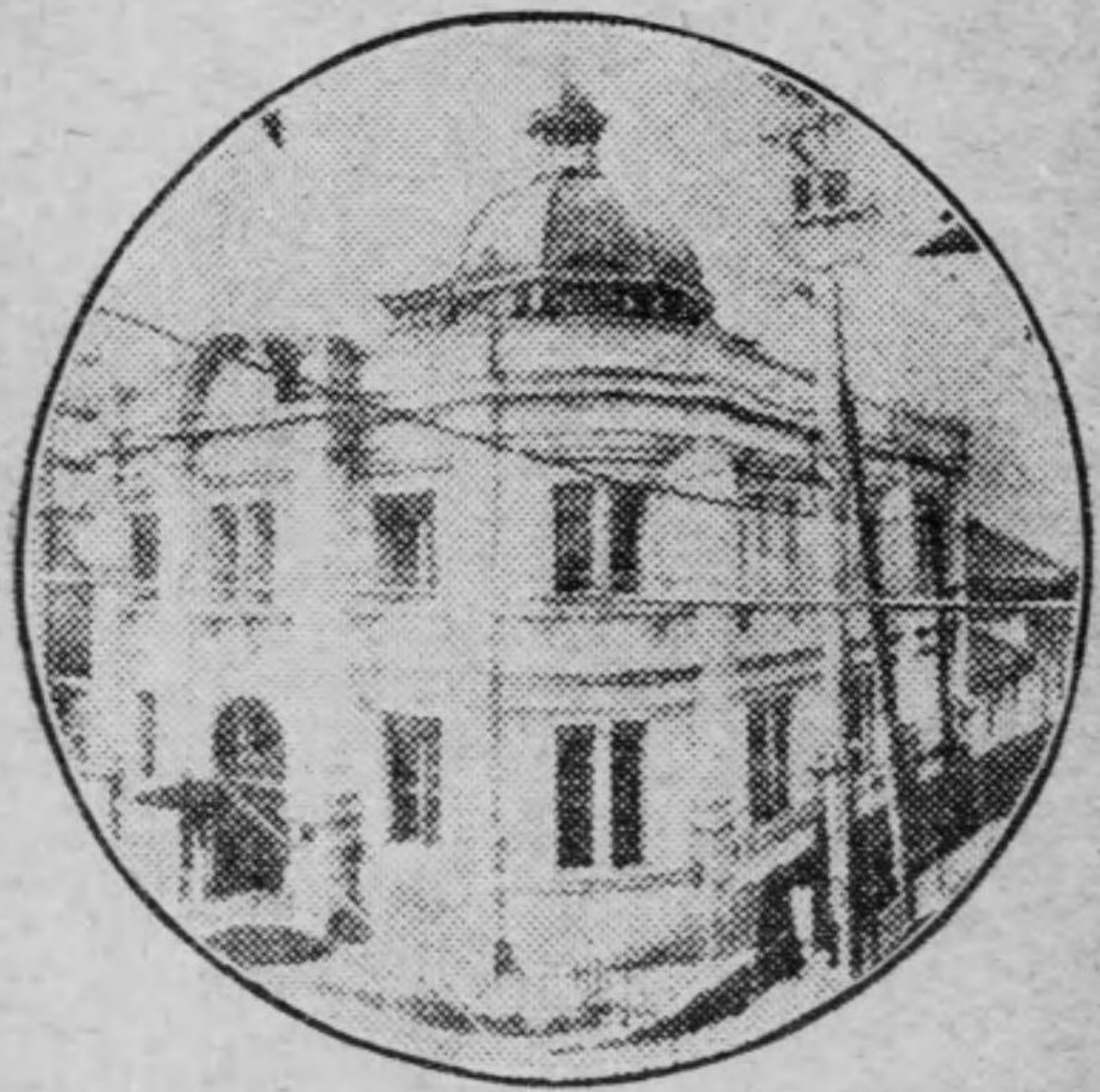
篠原叶
 篠原叶
 篠原叶
 篠原叶



群馬縣北甘樂郡馬山村大字馬山村
蠶種製家 恩田彦太郎



妙義御探に本館は宿御投の御便利であります
妙義町 旅館 養氣館



資本金 壹百萬圓
 積立金及
 繰越金 壹百拾九萬餘圓
 諸預り金 壹千四百七拾餘萬圓
 明治二十九年設立

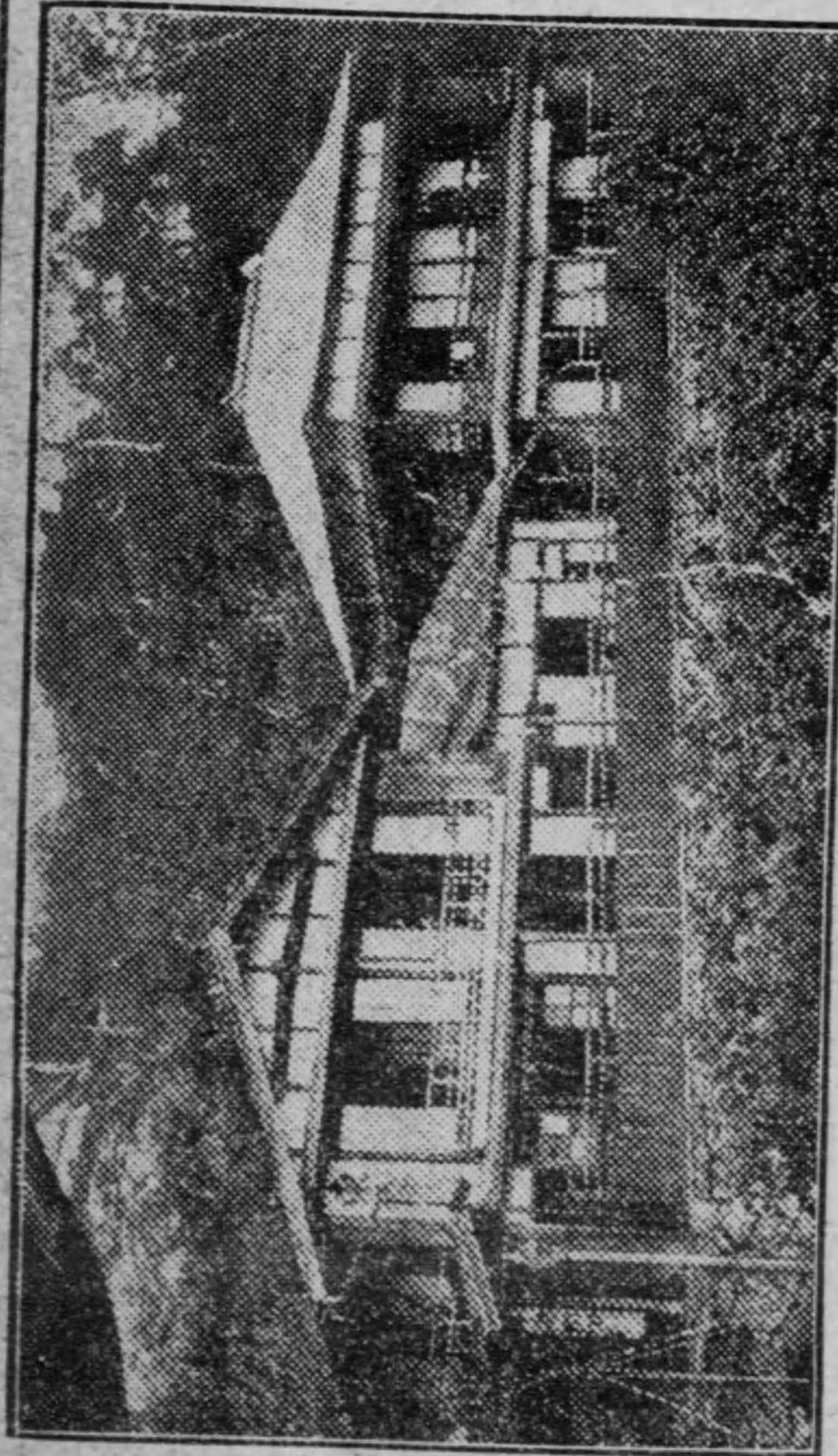
高崎市九藏町

合名 茂木銀行

高崎支店

電話 長三番
 電話 五十四番
 電略

社員 茂木惣兵衛
 同 茂木泰次郎
 高崎支店長 山田昌吉
 支店長 佐藤
 同次長 理



上毛三山の妙義御探勝御案内には本館で扱ひます
 妙義町旅館東雲館

日本石油株式會社高崎油槽所

高崎市旭町百貳拾四番地

常盤石油商會

電話五六六番

釜數二百六十八釜
壹ヶ年製絲高六百梱

高崎市並榎町

茂木製絲所

電話三七三番
電畧 七 七

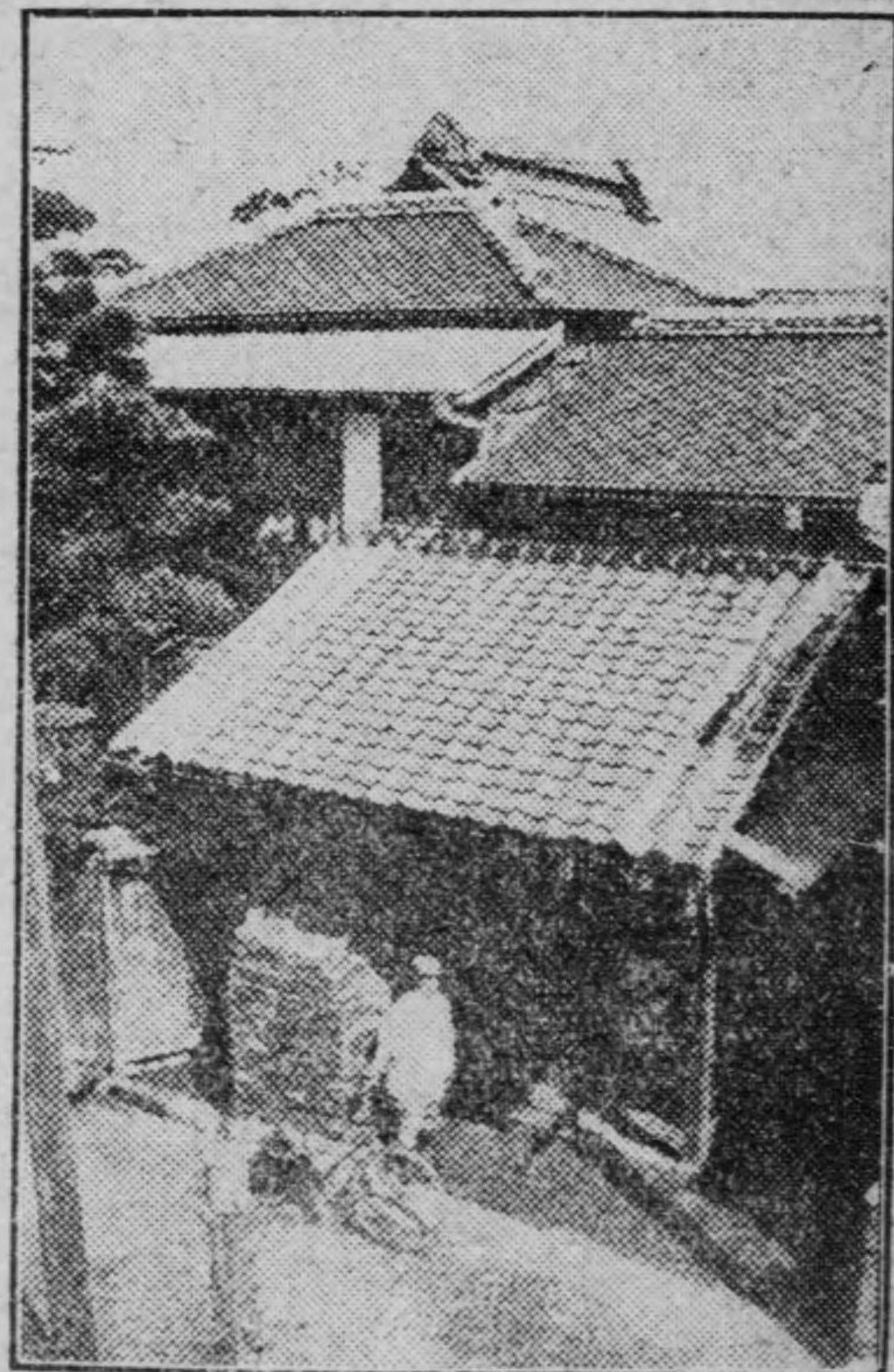
橫濱市辨天通二丁目

工場主 茂木 惣兵衛
支配人 橋本 清七

高崎市常盤町五十六番地

高崎水電氣株式會社

電話一四四二番



土木建築請負業

高崎市柳川町八十七番地

新島熊吉

電話五〇五番

高崎驛前(電話一四二番)

高崎倉庫株式會社

飯塚驛前(電話四一六番)

高崎倉庫株式會社飯塚支店

高崎市九藏町二十三番地

株式會社 上毛貯藏銀行

電話一一六番

高崎市寄合町

株式會社 高崎銀行

電話六番

土木建築請負材木商

高崎市旭町七

猿渡福太郎

電話五二一番

土木建築請負業

高崎市羅漢町三番地

島田熊次郎

電話五四七番

群馬縣生絹太織商同業組合

事務所 高崎市田町三十五番地
電話 一二七番

寶田石油株式會社專屬販賣店
ライオン・クサン石油會社蠟特約店
英國リバープール火災保險會社代理店

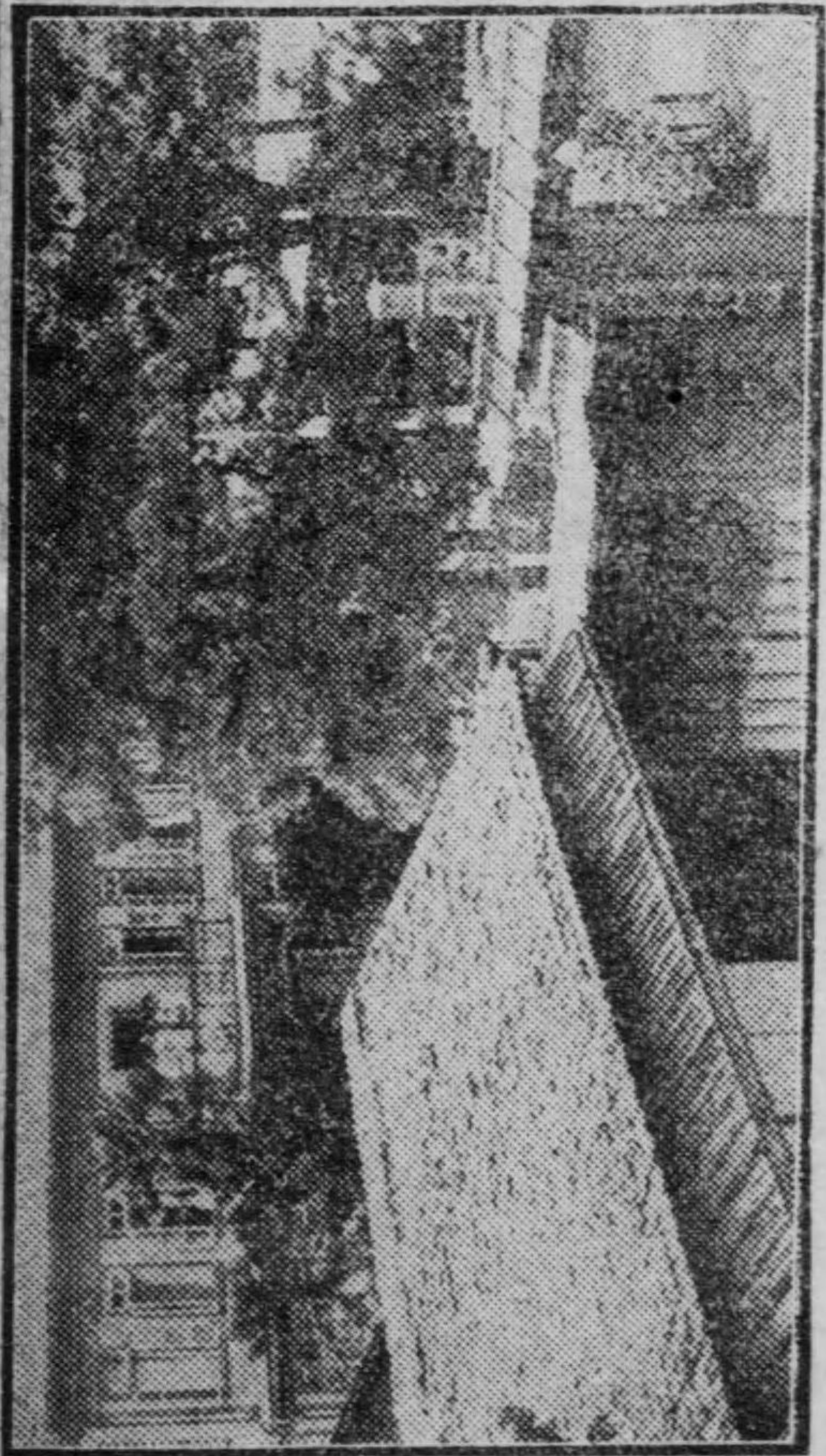
高崎市旭町百六十七番地

旭石油商會

電話三〇四番

宇都宮市川向町七十五番地(電話一四五番)
旭商會宇都宮出張所

高崎市中若松町
張出館
 電話 二四三番
佐藤
醫院



染絹卸賣生絹太織買次商
 日清生命保險高崎代理店

高崎市中紺屋町

中島仙助本店

電話長一二五番

高崎市停車場前
 日本遞業株式會社取引店

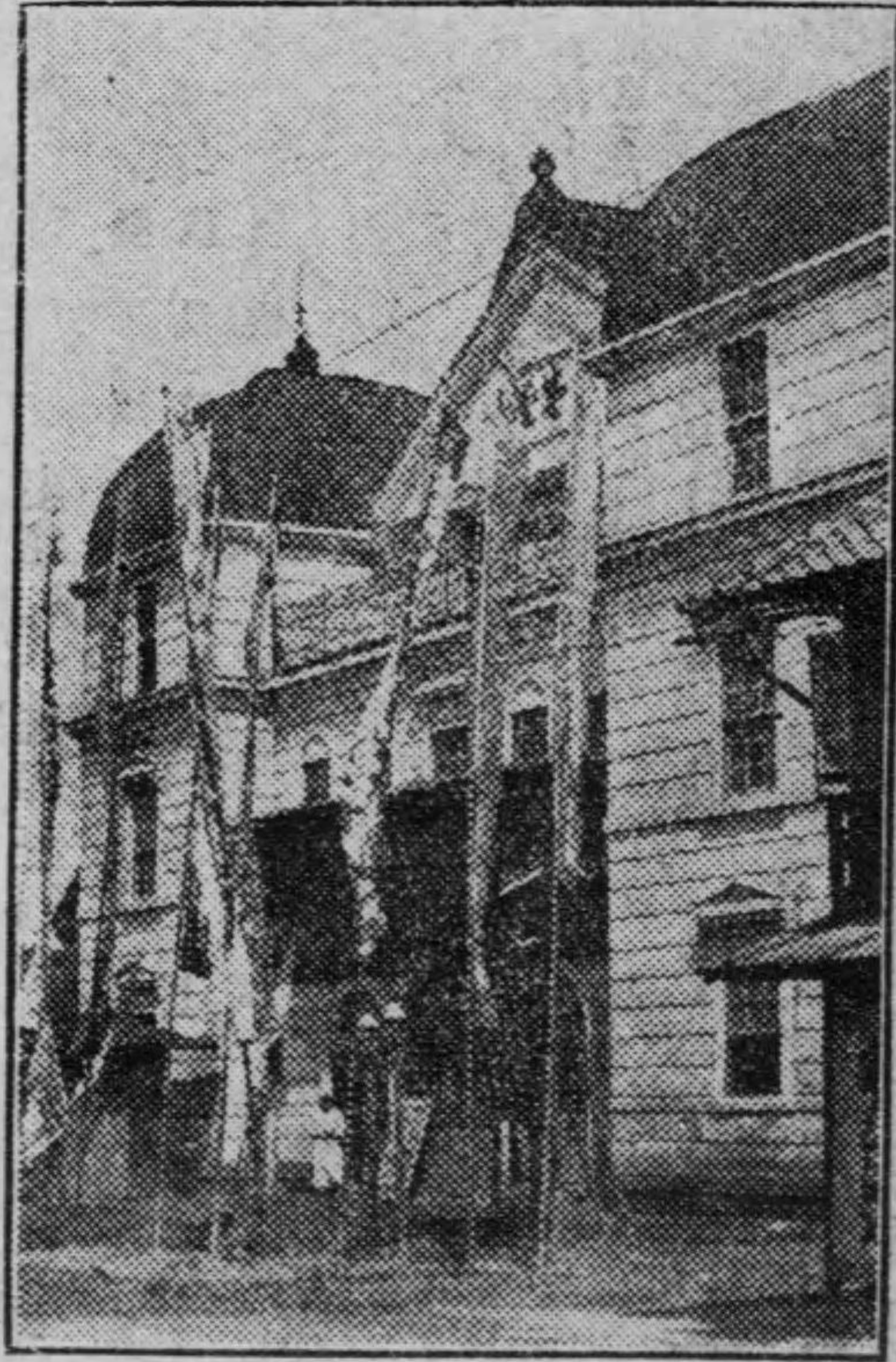
關口運送店

電話二三番
 口座東京四二七一番

高崎市九藏町四十一番地

山口屋合名會社
小澤商店

電話一二六番
 振替東京五六〇三番



高崎興行主萩原金次郎
高崎盛座

高崎市九藏町

株式會社 第一銀行高崎支店

電話二番

高崎市宮元町廿一番地

辯護士芥川辰次郎

電話四百三十五番

株式 伊勢崎銀行

電話 三二番

同 境支店

電話 一一番

群馬縣伊勢崎町

上毛撚絲株式會社

電話 一三七番

佐波郡伊勢崎町

株式 群馬商業銀行

電話 五五番

同 境支店

電話 二五番

佐波郡伊勢崎町

伊勢崎織物業同組合

電話 八三三番

上毛赤城山梨木鑛泉元

梨木館 深澤直十郎

足尾線大神梅驛より一里

●本閣は位置高燥神流川を眼下に瞰み武蔵の御嶽山に對し東北は原野遠く開け神流、烏、利根の諸川を距て、日光、赤城等の諸山を雲煙の間に望み涼風縱横東京最近の好避暑地中仙道新町停車場より南へ三里鐵道馬車にて本館の庭前に達す

八幡鑛泉 櫻雲閣 浦部旅館

●本泉は内務省東京衛生試驗所の定量分析に因り固形薬分の含有天下無比其一「リットル」中に三二・二グラム一四一七にして又今量中の炭酸の含有料は五・一グラム〇八二なり大正三年二月今所に於て「ラヂウムエマナチオン」の放射能作檢定に因り含有多量なることを指示せられたり

群馬縣北甘樂郡富岡町

原富岡製絲場

(電話富岡十三番)

埼玉縣兒玉郡若泉村

同 渡瀬分工場

(電話鬼石十三番)

蠶種製造

北甘樂郡馬山村

大河原茂平

蠶種製造

北甘樂郡馬山村

岡野兼吉

荒船風穴蠶種貯藏所

北甘樂郡西牧村

蠶種製造 庭屋靜太郎

878
946

終

